

大カに感^{かん}じ且^{かつ}つ門^{かど}の破^{やぶ}れしと喜^{よろこ}び賞^{しょう}嘆^{たん}措^そかざりけりマツトレー「汝^{なんぢ}が此^{こゝ}の大^{たい}功^{こう}の何^{なに}を以^{もつ}て之^{これ}を賞^{しょう}せんやマゴグ「僕^{わが}の別^{わか}に願^{ねが}ふし只^{ただ}君^{きみ}の命^{いのち}を以^{もつ}てフラスクハストーンと婚^{こん}姻^{いん}する事^{こと}を許^{ゆる}されさば此^{この}上^{うへ}の幸^{さいわい}福^{ふく}を以^{もつ}てマツトレー「其^{その}女^{をんな}にして汝^{なんぢ}を好^{この}まさらせばと其^{その}後^{あと}を云^いはせして打^{うち}ち笑^{わら}へバ「マツトレー「其^{その}女^{をんな}の命^{いのち}を以^{もつ}て彼女^{かのをんな}がマゴグと僕^{わが}と孰^{たが}れを好^{この}むかや擇^{えら}ばしめよマツトレー「ソハ六^むヶ敷^{しき}難^{なん}題^{だい}ありと笑^{わら}ひあがら先^まづ炬^{たいまつ}火^ひを持^もつて來^きるべし火^か急^{きゆう}の事^{こと}ありと云^いふに「マツトレー「牢^{らう}内^{ない}の嚮^{きやう}導^{だう}の僕^{わが}に命^{いのち}を以^{もつ}て給^{たま}へ僕^{わが}の先^まきにナイトに從^{したが}つて此^{この}中^{ちゆう}に來^きしことあれば中^{なか}の案^{あん}内^{ない}の能^よく知^しれりマツトレー「案^{あん}内^{ない}せよとマツトレーを先^まきに立^たしめてマツトレーが入^いれられし牢^{らう}の處^{ところ}に至^{いた}り見^みれバコルモンデレーとの思^{おも}ひさや繫^{つな}れたるの牢^{らう}番^{ばん}なるナイトにてありしかバマツトレー等^らの大^{おほい}に驚^{おどろ}きコハ如何^{いか}にと呆^{あき}るゝと久^{ひさ}しかりしにナイトの足^{あし}音^{おと}を聞^ききコルモンデレーが再^{また}び來^きりしと思^{おも}ひ誤^{あや}り大^{おほい}に之^{これ}を罵^{のの}し是^{こゝ}亦^{また}其人^{そのひと}と違^{ちが}ひしゆゑ暫^{しばし}しの呆^{あき}れて居^ゐたりけり斯^かくてマツトレーのナイトを責^せめ

てコルモンデレーの事^{こと}を悉^{ことごと}く自^じ狀^{じやう}せしめしが今^{いま}のコルモンデレーも既^{すで}に途^と上^{じやう}に於^おて死^しせし者^{もの}と察^{さつ}したり其^{その}時^{とき}ナイトのマツトレーの足^{あし}下^かに身^みを投^なげ伏^ふせ僕^{わが}を助^{たす}け給^{たま}ふあらバ内^{ない}閣^{かく}の人^{ひと}々の企^{くは}てし謀^ひ叛^{はん}の詳^{しょう}ある事^{こと}を訴^{うた}へんと乞^こひけれバマツトレーの「マツトレーに命^{いのち}を以^{もつ}てコルモンデレーの行^ゆ衛^ゑを尋^{たず}ねしめ又^{また}マゴグとナグをしてナイトを牽^ひ立てしめて宮^{みやう}中^{ちゆう}へと歸^{かへ}りける茲^{こゝ}に又^{また}宮^{みやう}中^{ちゆう}にての女^{をんな}王^{わう}のサイスリーと相^あ手^てとし切^きりよ談^{だん}話^わの折^せしもあれ傍^{かたはら}の壁^{かべ}に音^{おと}ありと思^{おも}へバ忽^{いつぜん}としてレナード顯^{あら}れ出^いで女^{をんな}王^{わう}の前^{まへ}に突^つ立ちたる其^{その}形^{かたち}相^{さう}の恐^{おそ}ろしさの魔^ま王^{わう}の如^{ごと}く見^みえよけり女^{をんな}王^{わう}とサイスリーの一度^{ひとたび}の驚^{おどろ}き一度^{ひとたび}の怖^{おそ}れ兩人^{りゅうにん}共^{ども}に物^{もの}をも得^たい云^いはず互^{たがひ}に顔^{かほ}を見^み合^あはせしが女^{をんな}王^{わう}の終^{つひ}に恐^{おそ}怖^{おそ}に堪^たへざ番^{ばん}兵^{べい}疾^{しやく}く來^きれ狼^{ろう}籍^{せき}者^{もの}ありと叫^{こゑ}べバレナードの「マツトレーと劍^{けん}を抜^ぬき戸^との入口^{いりぐち}に立^{たち}塞^さがり臣^{しん}の陛^{へい}下^かに向^{むか}ひ一言^{いげん}を云^いふべきことあり女^{をんな}王^{わう}「卿^{けい}の何^{なん}の用^{もち}あつて又^{また}何^{なん}の方便^{ほうべん}よ因^よつて此^{この}處^{ところ}に來^{きた}りしやと云^いひつゝ願^{ねが}ふ番^{ばん}兵^{べい}の如^{ごと}く何^{なん}せしや何^{なん}故^{ゆゑ}疾^{しやく}く來^{きた}らざるやと叫^{こゑ}びたりレナード「臣^{しん}の事^{こと}の問^とはでも宜^{よろ}し臣^{しん}の陛^{へい}下^かに知^しらしむべきとあつて來^{きた}れるあり即^{すなは}ち陛^{へい}下^かの一大^{だい}事^じと

そ出来たれ陛下の最早王位にあらざしてノルサントベルランドの戦敗れて
 既にマリーに降参したり女王「ソハ詐りならんレナード」陛下よ臣の言を疑
 ひ給ふな此の事の決して詐りあらす此の事今夜の未だ一人の知る者なし
 明日に及べば満塔の者悉く之を知り陛下逃るゝに道亦からん早や〜今
 宵の中に逃れ給へ女王「未だ疑はしき事どもあり假令之を信とするも如何
 此處を逃ぐべきや朕が王冠の譲るべく譲るべし併ながら卿の朕を未
 だ英國の君主ありと思ふべしと云ひつゝ又外面に向ひ番兵よ速に此の反
 逆人を捕へよと云ふ時しもレナードの壁に寄り添ふと思へば忽ち其
 形の掻き消す如く失せにけり女王のいと〜不思議に思ひ侍臣をして壁
 上を改めしむるに更に怪き處もなし斯る騒動の處にダットレー立ち歸り
 此の事を聞て大に怒り直にホワイト塔中へ赴き見るにコハ如何にレナ
 ードのみならず先きに捕へし人々の一人も残さぬ見ゆをありて只番兵のみ
 空しき牢を守り居たり之にて流石のダットレーも呆れ果て開きし口も暫
 く閉も得ざりける去れど止むべきにあらざれば只番兵を叱り散して急

ぎ宮中へ立歸へりしが此の間に宮中よて再び一事起りてダットレーの
 歸へるを今かく〜と待居たり即ち其事を如何にと問ふに女王がレナード
 に驚かされし間に執奏者の一個の指環を持來り一人の老婦わけて此の指
 環を出し陛下に謁せんと乞ふと奏したり女王の既にガンノーラなると
 を了り之を許して謁見すれば程もかくガンノーラの執奏者に連られて女
 王の前に進み來り恭しく敬禮を施したり女王「朕が好む所の老婦よ何の願
 わりて來れりや汝の願の総て之を許すべきの約束ありガンノーラ「妾の言
 を聽き給へ妾の言の忽にかし給ふべからず陛下に於て誠も必用の事あり
 かし今陛下の王冠と陛下の自由の身命の危急に迫れり内閣會議に於て
 の明日陛下を逐ひ女王マリーが即位を布告せんと決議せり陛下よ陛下
 の先きに塔中へ入らんと爲給ひし時妾が尊威を冒して言上せしとの今果
 して來りしあり陛下の運の早や盡たりと忌む所なく奏すれば女王の席を
 起ち汝の誠實の事を申すべし朕が敵の種々の言を以て朕を恐嚇せしむれ
 ども朕の心を服せしむると能はず今のは是非もなし一旦受けたる王冠を

「強奪に遭はざれば渡すまじと仰せよガンノローラのハテと涙と流し
 「ソチ陛下より強奪せんとするの時斬首臺より外にあり然れば陛下の今
 夜是非に此處を立退かれ給へ明日を待たば時既に遅れ悔もとも及び難の
 らんと満面に誠の色を顯はして諫言する折しも復忽然としてレナード再
 び顯はれ出で其傍にレナードと又半番打扮たるコルモンデレ
 が突立ちける其時レナードの嚴格ある貌にて女王に向ひ「マツトレーの
 命を救はんと欲せば早く此の書に調印せられよと一紙と取出して示し此
 の讓位の事あり此に記名調印せよ斯くせば女王マリーが如何に云ふとも
 君と君が良人マツトレー君との身の臣誓て之を助くべしと言ひ放てり女
 王「マリー何者ぞ朕の何んぞ此の書に調印せることあらんやレナード「臣の
 女王マリーの命を以て君を王位潜稱者と呼ぶべし君若し尙は王權を行は
 んとせば君の斬首臺を免るゝと云ふ時ガンノローラの其語を遮り女王
 又向ひ「今此人の言の詐りあらず誠は君の危急を告ぐるありと云ふ時レナ
 ード又ガンノローラ又向ひ「汝の何用あつて此處に來たりしぞガンノローラ

「妾の此の貴く然も人に語られ給ひし貴女に其身の危きとを知らせん爲
 めに來りしなりと云へばレナードの恐ろしき形相と眞はし「シテ又汝の此
 處に伴はれ來りしことを告げしかガンノローラ「否レナード「然らば余之とシ
 ヤン女は語らん抑此の婦のノルサンベルランド公の命により先王エドワ
 ード六世に毒藥を進ふせし者あり女王「恐らくの虚言ならんガンノローラ「誠
 なり女王「此の愚物よ汝の己と己を罪するかガンノローラ「其理の知ると雖も
 語らで叶はぬ其故の即ちノルサンベルランド公が罪を証せんが爲めあり
 女王「如何ある心にてノルサンベルランド公の斯る恐ろしき企をさせしや
 ガンノローラ「そのノルサンベルランド公のエドワード六世の病を公主マリ
 ーとエリサベスに知らせざらんが爲めに又君のと云かけしが後の口籠り
 て云ひ得ざれば女王再び問ひつめ「其後にと云ふにガンノローラ思切つたる
 有様にて「次ぎにの君を犠牲として王權と望まんと欲し幸ひ君と其子マツ
 トレーとが結婚の縁あるおよりエドワード六世より君に讓位の遺書を作
 らしめ先づ君を以て王位に即け次で己が子を王位お昇らしめ又次にの君

(二十九百)

を毒害せんと謀りたりア、君を害せんと謀り妾が始めに謀めし
ことの皆此が爲めあり妾の君を危急の中より不幸の淵より救ひ出さんと
力めたれども今の悉く畫餅とあれり女王「ア、朕の汝の言を信せり汝の忠
實を感せり然し妾が奇も王位の名を有ち其威權のあらん限り其身分
の權を行はざるを得せと云つゝ又デングローグ伯に向ひ疾く番兵を呼べ
と云ひ又レナードを指し此の以逆人と捕へよ朕の此の人の首を見る迄の
安眠すると能はせア、君も朕が命に従はざるか命お背かバレナードと同
く罪に處すべしと云ふ時コルモンデレーの俄に上衣を脱ぎ棄てレナード
ドに向ひ「汝の陛下の罪人なりと云ふにレナード「余を捕へ得べきかコルモ
ン「捕へ得べしと云ふよりレナードの烈しき聲にて「汝疾く退け余に向つて
毫も無禮を加へあば汝の直に屠らるべし最早女王マリーに敵するもの
一人も之を助けざるべし去りながらと云ひつゝ又女王お向ひ「貴女お明
日迄猶豫と與ふべし其間に能く身の進退を考ふべし若し王位を讓らば貴
女の命の余留つて助くべし只ノルサンベルランドが一族の一人を助る

(三十九百)

と能ふまじ女王「君の朕が夫君を犠牲とせるものと云ひつゝ又コルモンデレ
ーに向ひてレナードを指し疾く彼を捕へよと促せバレナードの怒れる眼
と道立て劍に手をかけ身構へて女王に向ひ「明日迄猶豫と與ふべし君の運
命の既に極れりと云ふ此の時コルモンデレーのレナードの無禮も堪り得
ず身を跳らせてレナードに飛びかゝればレナードも然る者あるに又デン
ブローグ伯も之を遮りければレナードの難あくるコルモンデレーを打倒し
壁に寄りよと思へば又忽ち二人の形の消よけりコルモンデレーの齒がみ
ををし「已れと云ひつゝ立ち上りし時しもマツトレーのナイトを牽き立て
宮中指して歸り來り此の有様を見て大お驚き又其事を女王より聞取りて
足摺して其遅きを悔ひ疾く其跡をとあせりければナイト「僕を自由よせば
諸君を秘密の隠處に案内し敵をして悉く君の手中に入れしめんマツトレ
ー「然らば罪を容すのみならず多く汝を賞すべしと之を容して尙ほ番兵を
引連れナイトを先に案内させて外の方へ出行きたり
備もコルモンデレーの後に残りて女王を守りしが今迄のレナード等が來

りて危急の事に取紛れたれば他の事に氣も付かざりしが今精神の少し
 く静りしに付き初て女王の後に侍づき居るサイスリーを見出し兩人互に
 『コレハ』とのみに驚きしが流石女王の前を憚り顔と顔を見交すのみ頓に言
 葉も出さざるに女王の兩人の様子と悟り卒に閑室へ退きて閑にマツトレ
 ー君の歸りを待つべしと二人を伴ひ一室の内に入りにけり數時を経てマ
 ツトレーの空しく歸り來り只管嗟嘆のみして居たりしが漸く在るべきに
 あらざればコルモンデレーをして番兵の總指揮を司らしむる命を賜ふ
 コルモンデレーの此の命を受け暫し氣を養ひし後コルドンと共
 に塔中を見巡りけるがタツヒル山中又多勢人の群集する状を見出しコ
 ルモンデレーが不審してクイントンに尋ねればクイントンの何か驚きた
 る様ありしが再び何氣なく左様あるか余よ何物をも見ぬすと答へしか
 バコルモンデレーの別に詮議をなさず其儘打過ぎたり是れ其群集の人
 のマリリーに黨與する者の群集せしにてクイントンも知らざるにあらざ
 れど初めの女王の無二の忠臣と見ゆし勢炎の盛衰に従つて向背を忽ち

○第十六回 榮華一夢 王冠落地

に變ずるの浮世の習と云ひながら此クイントンも早や心變りてマリリーの
 方に心を寄せければ今其黨與の集りしを悟られてのと思ひコルモンデレ
 ーを欺きしこと可哀けれ

老婆ガソノラを導きし怪物の是に於てレナードありしを知りコル
 モンデレーが牢丁の風俗をして去りしも此回にて其仔細を知り得べし

女王の上帝に身の安全を祈り其夜を明し曉て東天も曉を告げけるにサツ
 フホルツ公の連りに女王に王位を譲るべきとを勧めマツトレーの又王冠
 の高價を以て買ひたるものあれば容易く之を離さべから老大膽にして固
 く守らざれば今日の會議に於て衆議に勝つこと能はざるべしと勧めける
 が女王の遂にマツトレーの言に同意し其由を答へしもの思へば行末心
 もとなく悄然として頭を低れ物をも云はで居たりけるが兎角する中に時
 も移りて内閣會議員の人々集りければ女王も其場を臨み衆員に向ひ今日
 諸卿と呼集へし殿が治世中の最後の事にして朕と朕が王冠に對し一揆

反逆を企てたる者と鎮靜すべき謀を議する爲めあり諸卿の王冠の朕が正統に得べきの理を信し誓言して朕に王冠を受けしめしものされば諸卿の義務上職務上執れに於ても朕に向つて忠節の心を以て此の議を賛げられんとを乞ふありと仰するに議員中一人も之に對ふる者なく只紛々として見ゆければ女王の再び「諸卿の如何ある心あるや此の危急の場臨んで諸卿の朕を捨て顧みざるかと云ふ時に數人席を起ち如何も然りと答ふるにダットレーの勃然として「反人よ自ら罪を作くるかと云へばレナードのダットレーに向ひ「否々自ら罪を作りしどの殿下の事ありと云ひ了り再び烈しき大聲に貴女ジャン及びダットレーよ余は不正の處置を以て王位を潛稱せし者の面前に於て余が前王エドワード六世の妹にしてヘンリー八世の女ありしマリ嬢を英愛の女王として王冠を奉り眞誠の主ありと布告すべしと叫び罵れば其聲に應じて一同「神のマリ嬢を輔くるありと叫ぶに此内黙然たる者數人ありしをデンプローグ伯の劍を抜き大聲にて「天の余を助くるの間女王マリ嬢に服従せざる者の余直ちに之を殺すべしと罵

りながら帽を投げ出せばレナードも最早此の場合に臨み抵抗するの無用と知るべし余の今女王マリ嬢の命を以て女王マリ嬢に從はんと云ふ者に赦免の令を渡すべし併しあがらぬルサンベルラントの首の重賞を以て之を購ひ其一族の此の赦免に容るゝと能はざるべしと云ひつゝ又サツクフォオルン公に向ひ「速に塔の鍵を渡さるべしと云ふにサツクフォオルン遙に末座に控へたる巨人マゴグを指し鍵の彼所にありと指す時にダットレーの大い怒りサツクフォオルン公に向ひ貴君の降參せるか サツクフォオルン「此先き争ふも無用あり最早我々の失敗せり女王「實に然り諸卿よ朕の此の王冠を諸卿に譲るべし天の諸卿に許す朕は盡くせし忠をマリ嬢に盡くすことを許せりと云ひあがら又ダットレーに向ひ「貴君よ朕の貴君の言に従つて朕の身は大き害を蒙むり最も悲むべき罪累を受けさり今王冠を譲るの朕一己の決断あり朕の喜んで之を譲るなり以て聊か朕が罪を償はんと欲するなりと云ふを聞てダットレーの怒氣頭上と衝き「否々王冠の譲るべからずコルモンデレーの居らざるか女王に味方する者の疾く女王の邊を固

むべしと大に罵り叫びて四方を屹と見廻せども誰一人應る者もあかりしかば之を見て大に落膽したる状にて皆々反逆のみにして一人も忠義の者いなきかと口惜しき有様に座にも得着かず見むにけりレナード「殿下よ衆人の皆反人にあらず女王マリイの忠臣あり女王レナードよ卿の言の誠あり是より又争ふも無用あり朕の最早王にあらずと云ひ了り又諸員に向ひ「諸卿よ諸卿の既に此處の主人あり朕の此の座を退くも宜しかるべきかデンプローグ」尊き貴女よ貴女の其座を退かるゝの尤とも宜し然しあがら一言と言上すべきとあり君の身の悲しくも陛下(マリイを指す)の命ある迄此塔中に止まらざるを得ずと云へば女王の顔へあがら四人とされるの左りあがら朕の夫の朕と共に居らるべきかと云へばレナードの怒りし聲よて別に幽閉すべしと云ふを聞て女王の怒氣を帯び「君の無残との思はずやマツトレ」陛下よ臣が爲めに何事も宣ふ者臣の彼に少しの慈悲をも受くること得ずレナード「番兵よ疾くマツトレをピニーチャンプ塔へ連れ行けと命すれば番兵の聲も應じてマツトレを引立つるに女王の涙を流し

マツトレに別を告げ己のホルモンテレイとサイスリーとを連れて宮中へ退き入る其心の中を哀れあり茲に又マツトレの無残や番兵に追立てられ無念の涙を呑みあがら牢の中へと赴けば會議のアルンダル伯に命じてノルサンベルランド公が將帥の任を解き且つ之を捕ふるの權を委し次で出立せしむるを決したり其時レナードのギルバートを呼出しアルンダル伯に向ひ「此の者陛下(マリイを指す)以下皆同じに忠節にして大膽なる勇者あり之を伴ひ給へと云ひ終り又ギルバートに向ひ「汝先きに陛下に忠節の功を顯はしたり今又ノルサンベルランドを捕へて功を立てあば其賞として百封及エスワイルの階位を與ふべしと云ふにアルンダル伯もギルバートも勇みに勇んでノルサンベルランド公が居る地へ出立されレナードも諸人を従へチイプサイドに赴き馳せてマリイ即位の事を布告したり此に於て衆人の皆歡聲を發し大に之を祝しけり其れより使を諸處に走せて之を布告せしめければ祝聲歡聲ハ倫敦全市に充々たり即ちジャンの實父サツクフオルン公すらマツ

(百二)

ヒル塔に於て祝聲を揚げにける此の時ダットレーのピユーヤンブ塔より衆人の喜ぶ様を見て僅かに九日前にジャンを祝せし人も今の皆マリーを祝するか頼みなき人心かちと只管悲歎に呉れたりける

茲に又ジャンのコレモンデレーとサイスリーを相手とし常さへ凄しき塔中の逢魔が時の夕暮に身に降懸る憂き事を思へば思ひ彌増して身も浮く計の涙の海揖を絶たたる心地していと哀れに思はれけり斯くて夜に入りし後何がな心を慰めばやとて書を繕き少く氣の落付きたる處に俄に壁上に音するのと思へば又忽然として壁中よりジャンの顯れ出でしにジャンの大に驚きあがらジャンノラに打ち向ひ「汝の來るの何事ぞと云へばジャンノラノ口に手を當て高聲を出すまじと押し止め低き聲にて「妾の君を助けん爲めに來れりジャン」余の自由を願はぬぞ又余が身の汝に委ぬるとの叶ふべからず從妹のマリーが入城迄の此に在りて罪を謝し慈悲を乞はんと欲するありジャンノラ「ツハ不可ありマリーの嫉妬心深ければ必世君を困めん今の君の逃るべき好時機ありサイスリー」陛下(サイスリー)等

(一百二)

の尙ジャンを玉と思へば斯く云ふあり速に此の女の言に従ひ給へジャン「余の敵の手中に在れば假令ジャンノラの意に従ふも争で逃るゝとを得べきやジャンノラ「只妾の言を聞き妾に従ひ來給ふべし妾の此の地下を行くべき路を知れりと云へばジャンの躊躇して「夫ダットレー君の如何にして居給ふかジャンノラ「彼の人あるか君の彼の人に拘はり給ふなかれ彼の人君に不忠の人あり君の何時迄此處に居給ふとも彼の人に少しも益なく彼の人の逆も助かる命にのあらざるべし君此に留まれば徒らに彼の人と共に斬首臺上に終るべきありジャン「汝去れ余の逃るゝと能はずと云ふ傍よりコレモン「陛下此に居給ふもダットレー君を助くる術なし速かに身を救ふの策を行ひ給へジャンノラ「妾のノルサンベルランド公に對する怨の骨髓に徹して深ければ初めの如く云ひし者の又君の御心の程左こそと思ひ測り参らすればダットレー君をも助け参らすべきを以つて先づ君にの妾又付きて参り給ふべしジャンハウスに御伴ひ申そありダットレー君も夜明迄にの必参り申すやう計るべしジャン「汝が信實の言の最嬉しと

雖も其言果して誠なるか、ガンノローラ「彼の人の君の夫君にあらざれば、助くべきにあらねども、君の御心に對して救ひ參らすべし」と云ふに、コルモンデレー「此の問答の暇に、炬火を照し來り疾々と勸め、ガンノローラの元と來し壁上の戸を開き、此方へ來ませと先に立ち、甲斐なく導けば、ガンノローラの覺束さく、思ひあがら、人々の勸むるも其意に任かせて、從ひ行けば、黒白も知らぬ闇路を辿る有様に、コハ何處と不審それ、バガンノローラ「此の塔の地下の脱け道を以て充ちたりと答へつゝ、歩みを進めて、一ツの堅く閉せる門の處に至り、ガンノローラの「コルモンデレーをして之を開けしむ、ガンノローラも心怖ろしく、振へあがら、フト後の方を顧みしに、何か此方を望み居る者あるに、驚きて聲を立てんとするも、齒の根合はず、尙ほ能く其方を眺むれば、大ある斧を肩に、えたる人あり、ガンノローラの益々驚怖し、コルモンデレー等に告げんとする間に、其者の又何處にか消え、行きけり、此の時、石戸の開き、ガンノローラの「シャーンに進み入れよと勸むるも、ガンノローラ「今見し者に、付け此處は是れ刑場の入り口、あらんかと考ふれば、足に地に釘にて打付けられしが、如く一

歩も進むと能はず、只顛動して突立てるのみ、頻りに歩行を勸むるサイスリ「一向に、向ひ「シャーン」得難き少女よ、余の運命の尽きたりと思へば、逃がると詮なかるべし、一同「是非お進み給はれど、共に強て「シャーン」を促し、洞穴の中に進み入り、間も無く、堀の外に達したり、此の前夜、レナードがガンノローラを連れ來りし路あり、ガンノローラ「今より君の安穩あるべし、疾く「シャーン」ハウスに赴かるべし、夫君も追付け參らるべしと言捨て、元來し路へと返り行く「シャーン」の「コルモンデレー」と「サイスリー」の二人を伴ひ、ガンノローラを顧みれば、早や影も見ぬ、おそれ、最々心細く、思へども斯くてあるべき、よあらざれば、夫れより「シャーン」ハウスへと赴きたり

○第十七回 哀別離苦斷腸之花

雨の翅を剝れし如く、打萎れざる「シャーン」の許へ、突然來る人こそ、あれ「シャーン」の驚き、首を擧げて之を見れば、此の是れ、ガンノローラに助けられて逃れ來りし、夫「シャーン」ト「レナード」あり、二人の「ヤ、」と一聲云ひしのみ、互に抱き合ひ、少時言辭も泣ばかりなり、漸くにして「シャーン」の哀しき聲にて「ア、此の靜なる退隱所

を去て只身の榮華を願ふ爲め妄念に迷はされずバ今日までの苦いなかりしものを此後の妾等と只此處に餘年を送るを容され亦バ此の上なき幸福なるべし

「マツトレー」如何に哀しき言を宣ふぞ未だ望の盡さざるべし何時かの元に復りあん

「妾の身を餌としてか妾の如何に王冠を與ふるも誓ふて之を受けざるべし君の未だ非望の夢覺めずして尙は先非と悔ひ給はせや

「マツトレー」大人が軍勢を有する上の此と一体とあり今一度最後的手段を試みん

「ジャン」君の如き暴悪非望の君を斬首臺に導くあり妾も共にせらるゝとこそ悲しけれ王權の手はありし時分も之を保たざりしに王權の去りし今の身よて何事をか仕出し得らるべき

「マツトレー」然らば大人の軍略に長じされバ却て敵を斬首臺に引とを見るあらん

「ジャン」否々彼のレナード等に天より與へし助けあり彼等の我々を殺すにあらざれば怨の晴れまじ

「マツトレー」今更女々しく云ふにあらねど君が先きにレナードを信せせ又余の王位を嫌はせ又大人に遠征せしめせんバ斯までの成るまじきものを

「ジャン」君の怨言理りあれと假令君を王位に上し大人を

此に止め置くと決して勝を取られまじと云ふにマツトレーの少しく憤懣の状にて「卿の言の少しも理なし

「ジャン」今迄口外にせざりしが大人の妾を餌とし機至らば妾を除き自ら王たらんとの望みありしと云ふを聞てマツトレーの大に怒り

「ジャンよ」と叫びて白眼居たり

「ジャン」少しく心を落付け給はれ

「妾の君の怒を起し互の不和を生せん爲めにあらせ斯く云ふの君の胸中に未だ煙霧の晴れやらすして迷の夢往來する爲めに之を止めんとて斯く云ひしあり

「マツトレー」大人の何條去る非望のあるべきと云ふに「ジャン」容を正し

「君よ妾に大人のエドワード王を毒殺せし証あり又妾と毒殺せんとせし証もありと云ふに

「マツトレー」堪り得ざる状にて満面に怒氣を含み壁を荒らげ

「ソハ」虚事あり全く敵の虚構あり卿の未だ敵に欺かれ居るやと云ふ時何時の間に此の宮殿へ忍び來りしか

「次の室にて洩れ聞きたりし

「ガンノ」ラハット顯はれ出で

「マツトレー」よ向ひ

「左」あわらずエドワード王の妾即ちノルサンベルランド公お頼まれて毒殺せり

「君の夫人も同じく毒手に運命と絶れ給ふべき所ありしと云ふに

「マツトレー」虚言を放つ

(六百二)

勿れ此惡女よツハ虚事なりくと云へバガンノーラの「コレもても尙や争ひ給ふかとノルサンベルランド公より頼まれし時の一書を渡せば流石のダットレーも之を手に取り一目見るや否や面色變じ思はず之を地上に落せりガンノーラの満面に笑を含み又云ひ出るやう君等の妾の新聞を聞け君の親父のケンブリッヂにて既女玉マリーに降参せりダットレー「如何ぞ然るとのあらんガンノーラ「否實あり昨夜其報ありし故アルンダル伯の直らふノルサンベルランド公を受取らん爲めに赴きたりと云ひつゝガンノーラ又いと恐ろしき形相にて莞爾として齒を剝出し妾のノルサンベルランド公が先きに殺せしソーマル公と繋ぎし牢中に繋ぐれ又ソーマル公が斬られたる斬首臺まで同一の斧を以て斬るゝを見て満足を得ん「ア、恐ろし、汝早く去れ汝居れば我心を苦しましむべしガンノーラ「妾の何處にあるもジャン君の守護神となるべしと云ひ捨て、ガンノーラの出で去りしが後にダットレーのケンブリッヂに留まれるノルサンベルランド公の許に行かんとするをジャンの押し止め左右して夜も深更し頃が

(七百二)

ンノーラの復た再び來り「君等よ新しき災害來れりと云ふにダットレーの急忙しく立上り「如何ある凶報ぞガンノーラ「疾く逃れ給へレナードが君を捕へん爲めクイントンをして一手の兵を率ひ此處に向はしめたり早く逃げよ一瞬間も躊躇ふべからせと云ふにダットレーの驚怖して「何處へ逃げんかと狼狽るにジャンの却て恐怖の色なく落付さる顔色にて「最早や運命盡きたり天に任すべきのみと云ふにダットレーの直ちに劍を帯び上衣を着け「コルモンテレーよ共に來れ今よりケンブリッヂに赴かん大人の手に一旅の兵だもあらば今一戦を挑むべしガンノーラ「ノルサンベルランド公の將に塔中へ引き來らるべしダットレー「ナントガンノーラ「妾の孫ギルハートポットンの之を捕へたり孫の其功に依り百ポンドの土地とエスクワイルの位を得たりノルサンベルランド公の捕へらるゝ時に當りアルンダル伯の前は伏し卑しき狀にて哀憐を乞ひたりしぞ笑止あり今よりの我々がノルサンベルランド公を處置するを見られよジャン「早く去れ我の不幸を嘲笑する勿れガンノーラ「妾の貴嬢を欺むく爲めからせ信實の

心をもつてなり。ツヤン「ツノ信實の忝し去れど今の無用なり願くの人々此處を去て我々夫婦のみをわらしめよと云ふに皆々是非あくも愛ひを殘して立去れば間もあくツイントンの甲冑に其身を固めて兵卒を前後より従へ入り來れりツヤンの之を見て「妾の君の使事を知れり君の妾等を塔中へ連れ行かん爲めあらん妾の君を待てり」ツイントン「君の覺悟の貴むべし用事あらば心置きあく做し給へ」ツヤン「何事もあし」ダットレー「余もあしと云ふにツヤンの又サイスリーを指し「妾の願ひ此の婦人を共にせんことを」ツイントン「ツハ出來ざるありと云へバダットレーも「コレモンデレーを指し」此の者を従へんと出来ざるや」ツイントン「ツハ容るすべし去れど若し從ひ行かバコレモンデレーの身の危かるべし」コレモン「臣の死すとも辭せませ」ツイントン「天晴れ武勇の忠臣ありと此の問答の中にサイスリーの泣くも昨日までの女王と尊まれし千金の身の夜露に襲はれ給ひあは如何に堪難くやおとさんとして天鵞絨の上衣を取り後よりしてツヤンに被せ參らせ前に廻りて何に事をか云とんどせしが今の言も出でず只涕の淵に伏し沈めバ

ツヤンの之を抱きしめ「汝と今別るべし汝の後に残りて情人と婚儀と結び永く幸福を受けよと別れを告げし其時の涕を落さぬものもあし」ツイントンの何時まで其ての限りあかるべし心弱くての叶はじと促し立て止まざれバツヤンの力なく「サイスリーの肩に助けられてダットレーと共に岸邊に繋ぎし船の許に赴き馳て之に乗り移れば兵士の其周圍を取圍みツイントンの一令と共に其纜を解くに又今更らにコレモンデレーのサイスリーに別れを惜み此時迄も岸上に立ちしが今船の出でんとするを見て大に驚きサイスリーに別れも告げずヒラリと身を跳らせて船中に飛入たり後に殘されしサイスリーの主君と情夫と諸共に死地に赴む状を見て心も氣も狂亂し其船待てはアレよくと呼ぶ聲の次第に枯れて細くある之に連れて人々の乗りし船の遠さかり船上に照せし火光もいつしか見ぬをなかりにけりツヤンの船中にありてそゝる先きにダルハムの家より倫敦塔へ赴きし時の事を思ひ出で榮華を極めし行列の様の尙ほ目の前に見ぬ又ガソソラが途中にて止めし言の今も耳は止まり雷鳴電光の耳目に存して

目前に見る如くあれは其悲に得堪ずしてカハとばかり夫ダットレーの身に伏しかゝれり程なく船の岸邊に近きジャン等の兵卒に圍まれて塔中へ入りけるが其時塔門の邊に二人の者來れり一人は彼の恐るしきレナードにして今一人はデノエールスあり其時レナードの悪々しくも得意顔にて「祭禮の終りより十二日の女王の芝居の濟みたりクイントン君よジャンの先づマストル(半番頭)パトリックの家へ置きダットレーのビューチヤンア塔へ連れ行き候へジャン「我々兩人の終り別れねばならざるかクイントン」女王の命ゆゑジャン「女王とレナード」女王の即ち天の保裕とる英國の女王マリーありと聲あらくしく言ひ放てり

○第十八回 王冠替地女英傑踐祚

千五百五十三年八月三日マリーの壯大の行列にて倫敦塔へ入御しけり今其人とありを略叙せんに氣力あり勇力あり大膽にして困苦に忍び威容自ら人を服せしむ只其一疵の宗教を固守とるの癖是あり此の一點の汚れあくんバーの玉人あらんに惜ひべし之が爲めに全体を汚したり學識のジャン

ンに及ぶべくもあらざれと羅典語に通じ又佛以の語も達し辨才あり論議に長じたり只宗教を固守せるが爲めに頑固にして虚飾を好み此の日マリーと共に來りしマリーの妹エリサベスの容色と云ひ性質と云ひ姉に勝りて美麗優雅なり斯くて女王マリーの入塔するや否や先づ舊教信徒の牢獄に繋がれたる者に赦免の沙汰を行ひたり其容されし人々の中第一に女王の前に進みし者の年老ひざる貴人あり女王の之を見るや否甚だ感激したる狀にて涕を流し「ノルフオルク公よ公おの父王治世の時の申渡しに反せる待遇をあそべし公の爵位と財産の悉く之を返へし與ふべしと云ふ次にガーツチル進みければ英吉利王國の大法官を命せられ次にボレナールの僧正進みければ倫敦の寺領を與へらる次でダルフハムの僧正ダレストール及びソームレルセツト公の夫人等進み悉く恩宥の命を蒙むりたり最後に年未だ若くして容顏麗はしき美少年進み來れり之れを誰とかする即ちイキシター侯の子にしてエドワード、シールテチーと稱へエドワード四世の末女ガゼリンの孫にしてマリーにの従弟に當れりマリーの最と悦ばしき

顔色にて「今君を見るの誠に喜ばし君の父の最早蘇生せしむるとの出来さ
 るも朕の君を以て君の父の如く待遇すべし即ちデボンシル伯とあすべ
 しと云つ傍に坐したるマルテンを見て優しく笑を含みたり衆人の之を
 見て女王に「今夫を撰み給ひしかとの疑ひと生じふりマルテンの口の中
 にて陛下の今彼を娶るが如しと云ふをレナード聞取りて此の蕾の中に散
 らし捨てざるを得ぞ我等の女王の爲めに結婚せしむべき良夫を持てりマ
 ルテン「君の主人即ち西班牙王ヒリツアにやあらん此の人の舊教信者にあ
 らざれば至極適當ある伉儷あるべきにと云ふにレナードの何事も返答も
 なく一人微笑して居たりけりデノエトルスの二人の語を聞き大に驚き直
 ちにマルテンに與して此の企を取らんと計を生じたりマリーの其時ク
 イントンに向ひダットレーを牢中へ繋ぐべしと命じたり榮枯盛衰處を異
 にす昨日迄の幽窓の下に呻吟の日と送れる人の今日忽ち玉殿に美食に飽
 き之に反して今日迄の香閣の繡衾に暖まりし人の今よりの暗處に悲泣の
 夢を結ぶなるべしマリー又命を出して先王エドワード六世の遺骸の舊教

の式を以て葬るべし之をウエストミンスター大寺に於て執行すべしと此
 の命を降くや否やクロンメルの席を進め「コハ如何なるぞ先王の新教を
 奉せられし者をと云はせも果てずマリーの怒れる顔色にて君の朕に逆ふ
 事を止めよダットレーを入獄せしめしとを知らずやと云ふにクロンメル
 の大膽も「假令君命ありとも如何なる不興を蒙むるとも臣の臣の務を行
 はざるを得ざるあり先王の新教者あり新教の國教あり故に新教の式を以
 て其葬式を行ひしに至當なり臣が苟くも宗教の權を有つ以上のウエスト
 ミンスター大寺に於て決して舊教の禮を行はしめざるありマリー「然らば
 明日舊教を以て國教となすの布告を出すべし此にて君も朕の意に逆ふと
 の出来ざるべしと此議未だ決せざる時クイントンの進み出で「ノルサンベ
 ルランド、ダットレー、マラン等に付て陛下の御意の如何んと伺へばマリー
 しいと軽く「何れも牢中へ繋ぐべし朕の此にて先づ憩はんとて侍者も案内
 させて奥ある宮殿へ入りけり
 却説マリーのブリツン塔中へ幽せらるゝに定まり番卒に送られて之に赴

(四十百二)

途中に於て計らずもマットレーのボーヤ一塔へ幽處を轉せられ番卒に護られ來れるに會ひたり互にソレと顔の見合それと番卒に隔てられ寄合ふとも叶はずして只眼中に涙を含める狀に千萬無量悲哀の態を顯はし他の見る目も憫にて情を知らぬ番卒迄頻りに惻隱の心動られて已等が心ばかりの情にて兩人に相ひ會ふ事を許しければ兩人の進み寄るや否や餘りの哀しさに一言も云ひ得ず聲を飲みて暫しの間抱合ふて涕の淵に伏沈めり時に巨人のマガゴも番卒の中に交り居たりしが此の有様を見て悲哀に堪へず鬼の如き眼より豆の如き大なる涙を流し聲を放て泣きたりけるマヤンの漸く頭を擡げ我々の等しく罪われば早晚刑せらるべしマットレー「斬首臺にてマヤン」此の世にて我々夫婦の斬首臺にて別るゝも天上おて一處に相逢ふべければ只上天に向ひ冥福を祈るべし今日より此の悲を最早や天運に任すべしマットレー「余も斯く思へども未だ生存の望ありと云ふを聞てマヤンの形相を變へ最早左様ある無用の事をバ云ひ給はず早く去をして此の地球より天上へ轉せしめよ天上に於て永く王位は臨むべしと云ふ時に番卒の進寄り兩君よ此の暫しの會合を妨げるにあらざれども職務なれば是非もあし卒さくと兩人の別れを促せばマヤンの尤ありと云ひつゝマットレーに向ひ「早や御暇告ぐるあり偏に君の爲めに未來を祈り申すべしと云ふにマットレーもマヤンの手を己が胸に當てしめ「余も卿の爲めに平穩を上帝に祈るべしと此一言と共に更に相抱きて左右に立ち分れ二足三足歩みしが互に振廻へり見て眼の中に別を告げ各己が幽せらるゝ獄屋の方へ赴きけりマヤンの幽室にマヤンを慰めんが爲め珍しき繪畫と美しき道具と數多取揃へありけるが番卒の一の腰掛に指し彼の先きに女王アンボレインが用ひられし椅子なり君も之に倚るべしといたはり云ふにマヤン「丁寧の心付け辱けあし妾の恰も彼の婦人と同じ不幸に當れり番卒よ外に命令書のあらざるかど問へば番卒のなしと答へて立去れり後マヤンの獨り取り殘されて腰掛に倒れ伏し前後も知らざ悲みより

(五十百二)

○第十九回 西使曉昇白塔弄其光景

シーモン、レナードのノルフ、オルガ、リツナル、ユール、テネー、アルン、ダ、ル、デン、ブ、ロ、グ、等と會し自ら議長とあり種々施すべきとを議し深更に及びて散會しレナード一人庭園に出でて英氣を慰し又何事かを頼りに考へけるが其内に夜のやのくと明そめざり時に誰人か来る者ありレナード「誰なるやと問へば其人の牢番ありと答へたりレナード又「何事を爲すと云へば牢番「巡回の爲めあり此よりホワイト塔の絶頂へ赴くありレナード「差支へなくバ余を同道せよ牢番「ハ臣が榮譽あり其頂上の好景色にして十分の價直ありと云ふそれよりレナードの牢番に伴はれてホワイト塔の屋上に昇りけるに旭東天に昇りて其紅色のホワイト塔の壁上に映じ其反射の光彩四方を射りて輝々畫圖の如しレナードの此の好景色に感じて暫し見惚れて居たりける牢番の其所より一見する所を指し彼所の何に此所の何に又此の倫敦塔の來歴の云々あり又宮殿より地下の牢中へ送ありて其牢よりハ斬首臺へと續きざりと細かみ之を説き示せりレナード「英國の實に殘酷ある王に支配されし者あり牢番「ヘンリー三世の此所をして種々ある用を

あさしめたりレナード「如何も又今日其女のシヤン此所に於て同じく恐るべき事又逢ふならんぞ云ひつゝ又ビユーチャンプ塔を指し「先づ第一に斯くせらるゝ者の彼所にありと云ふに牢番「ノルサンベルランド公の事を宣ふからん僕の彼の夫人(シヤンを指す)の姦黨の首領されども固と姦人に脅されて興みせし者されば其人の身だに助からば餘の人々の如何にせらるるも心に愁ふるといふし誠に可憐あるシヤンあるかあと云ひつゝ又ブリツン塔を指し「彼所に石の壁の見ゆるあり其中の婦人の一人膝に伴はれ呻吟せるからん聞くに日夜只祈禱のみに時を送れりと云へりとレナードの此の話を鼻にてあしらひ「彼の女の舊教に付くか然らずハ斬首人の手に死そるかの二つありと云ふを牢番の聞かざる様にて居たりける其中に時も太く過ぎければレナードの復た牢番に案内せられて塔屋を下り園中に來りし時にビユーチャンプ塔の窓より首を出し上を眺むる者ありレナード「彼の誰あるや牢番「斬首人のモーガーありレナード「誠に然るか然らば余の彼の者に語るとありと云ひつゝ歩みを進めざり

話頭兩分ノルサンベルランド公の牢中に繋ぐれしより早くも十四日を過ぎ容貌大にやつれたれども氣分の左まで弱りしにもわら老殊に八月十八日に吟味せられし時に大勇んで法廷に出でたり其日のノルサンベルランドの夫人及び長子ロルドギルホルド、マットレーも一處お吟味を受くるに定まり控所に於て互に面を會したりノルサンベルランド公のマットレーの首を抱きマットレーよ我子よ容されよと云ふマットレーの怪みて如何あるとを云へバノルサンベルランド公のいよく「悲み斯様ある憂き事に汝を逢はしめし事を容せと云へどマットレーの悲む状なく「何にとて憂き事又逢ひしともあし兒の大人の心に同じく行ひたる事あれば失敗して苦を受くるも道理ありと思へバ之を苦とも覺ぬざるありと答へたりノルサン「全く余の罪あり余の此の企の首領ありマットレー「大人よ兒の事を思ひ給ふち兒の大人より命を賜とりしものゆる其命を捨つるも惜からず大人をして斯く失敗せしめし兒の罪あり反つて此の過ちを容るされんとを願ふありノルサン「天若し汝に幸するとありて裁判官に對する時

に少しにても汝の利益とある機あらバ余の之を失はざるやう辨護すべしマットレー「兒の千度此の命を死とも大人にかゝる事と望み申さるなり只速に裁判官の言に従ひ給へノルサン「如何にもマットレー「我々の望もかく恐るゝともなし賭博に負けしゆゑを以て其罰金を拂はざるを得ざるべしと云へば又ノルサンベルランド公の夫人の首を抱き出来る迄のあざんとす余の一身もて此罪を負ふとの出来ん限りの身に引き受けんと思ふあり夫人「最早逆も能ふまじ此の上の我々をして大丈夫らしき振舞わらしめて敵に笑を取らるゝとあからしめよ君に運命に安んせバ皆々既に運命に安ん居るありノルサン「最早我も運命に安んべし然しあがら今一度前日の權を得て復讐を遂げたき念願ありと云ふ時しも半番の進み來りウエストミニュストルの書院へ出づべきことを告げ去るにノルサンベルランド等の其命を聞き立出んとする時又一人の老婦多くの見物人を押分け進み來りノルサンベルランド公の前に進み來り君の妾を知るやと云ふにノルサンベルランド公の之を見るや忽ち身を振はしガンノトラかと云へバ老

婦「然り妾の今より十八ヶ月前に君が殺せしツォメルセツト公を育てし者なり先きに公の引出されし時の多くの見物人皆涕を流して悲みしが今君が斯く引出さるゝも誰れ一人泣き悲む者のあし然しかがら死刑に逢ふの同じかるべし君の斯く身を振るはすも道理あり恐るべき報怨のとの近きに来るべし君が殺せし人の彼の禮拜堂に睡りてあり君も遠からずして其處に行くべきありと云ふ時クイントンの罪人の警固としてありけるがガノノーラが言を餘り氣の毒と思ひけれバ之を制して「老婦よ少く静にせよと云へバガンノーラの首をふり」妾の言はざるを得ず妾が此人に向ひ此の世に言ふとの最後の語されバ言はざるを得ざるなりと云ひつゝ一の手拭をノルサンベルランド公の目前に突付け「コレ見給へ此の布の君が殺せし人の血に染みてあり之れ即ち君に報はんとして残し置きしあり君の疾く裁判所に行け疾く死に行くべし疾く」と云ふにクイントンの堪り兼ね番卒に向ひ此老婦を他へ引退き行けと命するに番卒のガンノーラを伴ひ出して外へ行かんとするに尙裁判所に行け死に行けよと叫び罵ること已

まざりけり斯くて又ノルサンベルランド公は番卒に守られウエストミコ
 ストル大寺の裁判所に至りしに其中央の大なる斬首臺あり上手に天蓋
 あり其下の即ち宮内卿ノルフオルクの席にして即ち此日の裁判長あり其
 より兩側に二十七個の椅子を連ね各々貴顯の人々の席とし其最も下手の
 盡くる所を罪人の席とす斯くて掛官の各其席に付きノルサンベルランド
 公も罪人の席に引据られしが立て衆人に一禮を施せバノルフオルクを除
 くの外の他の人々も皆立て禮を返しけり時よノルサンベルランド公座中
 を見渡せば先きに己を畏れたりシアルンダル伯デンブローグ伯スリス
 プリーハンチングトンリツチダマルシー等も今己を取訊その役員とあり
 威を振はして扣へたり殊も右手に大法官ガークシル威儀を正して扣ゆ
 れバ左手にノルロードベীগゲツトも扣へたり既にしてベীগゲツトの立てノ
 ルサンベルランド公の告訴状を讀上ければノルサンベルランド公立てノ
 ルフオルクに向ひ「余の此處に於てバ眞實柔順にして何事をも論辨せざる
 べし然しながら裁判官の公論を乞ふに二つの要事ありと云へバノルフオ

ルツの丁寧に述べられよと命するに、ノルサン「第一に僕天子及び内閣議
 會の意見と大英國の國璽を押したる書を以て爲したるとの反罪とせらる
 べきかを問はん、ノルフォオルツ「君の身に於ては無論然か思ふべし君が威權
 を與へられたる其印璽の正當の英國王の印璽ならずして、潛位者の印璽
 り然れば其書も正當の者にあらざるありと云へば、ノルサン「ベルランド公
 の一禮して、第一の答の得たり如何にも命を聽けり即ち第二の云ひつゝ、
 恐しき顔をちし座中に見廻しながら、此處に居らるゝ諸君の僕と同一の罪
 あり僕の所行の一切此の人々の指揮を受けたるあり然るに其人々が法
 とありて僕の罪狀を吟味するといふ正しきとか將た不適當のとかを問はん
 ノルフォオルツ「如何にも此の人々も君と同じく事に關係ありしといふ知れ
 し別証に證據なければ、法律上吟味をすべき様もなく又斯る事女王の御
 意にあらざれば、裁判所に呼出すと能はざるありと辨じたるに、ノルサン「ベ
 ルランド公の一拜したりと雖も如何にも輕蔑せし風にて、了承せり僕の最
 早告訴の不當を論辨するも無益の如く思ふ故に告訴狀の儘に服をべし只

願く殿下より女王陛下へ僕の身に付き慈悲の願あらんと乞ふ且つ僕
 の殿下及び諸君に向ひ一の願あり即ち陛下の僕に四の請願を許さるゝ事
 を願ひ給はるべしと云ふに皆々暫く首を傾けしが、雖て一同承知せり其事
 柄を陳べられよと云ふに、ノルサン「ベルランド公の喜びて然らば之を陳べ
 ん一に僕の死を昔日貴人の爲したると同一にせられん二にいと云ひ
 かけ餘程に言兼し風情ありしが氣を取直し陛下の僕の子息等に慈悲を掛
 けられ子息等をして永く陛下の忠臣たらしめんとと此の語の未だ終ら
 ざるに其子のマツトレーの傲慢の狀にて之を遮り「僕の父の願中に入らざ
 るなり僕の慈悲も願はせ又慈悲の得られぬ身あり死すべきの適當のとな
 りと云ふに、ノルサン「ベルランド公の涙を流し「暴あるか我子よ汝の己と
 己が身を傷るかど云ふ時、ノルフォオルツのノルサン「ベルランド公が心の中
 と思ひ遣り坐るに憫を催し「ノルサン「ベルランド公よ充分に意存を述べら
 れよ子息達が如何ある言を放たるゝも我々の之に關はらざるなりと云ふ
 に、ノルサン「ベルランド公のいと有難しと謝しつゝ、さて第三の僕の良心の

教導よ付て僕も然るべき學者を與へられんとを第四の陛下の陛下の代理として會議局の役人二人を僕の許に遣はされ僕をして陛下の爲めと國家の便益とになるべきとを話さしめんとを乞へバノルフォオルクの悉く承知せりと答へたりノルサン「今の願ひ悉く聽さるゝ上の茲に尙加へよき數語ありノルフォオルク「述べられよノルサン「不幸あるジャンの事ありジャンの罪の僕に座せられしあり人々も知らるゝ如くジャンの王位を望みしにわらずして他人に強ひられて餘儀なく受けし王位なれば憫みを垂れ給はんとをど斯く述べ終つて退けバ始より笑ひあがら聞居し子息ダットレ一ハ此時進み出で陛下に一の慈悲を願ふべきとあり此度死罪に行はるべき者の財産の悉く没収せらるべきよ付てハ僕の財産中より僕の負債を返濟せられ其餘を没収せられあバ最と有難き恩恵と思ふべし此外に云ふことありとこれにて此日の吟味ハ終りノルサンヘルランド公等の番卒よ送り出されしが其時不意に女の聲して「汝等の鉞を見ざるか鉞の彼の人よ向ひしを見ざるか今ソーメルセット公よ殺せし人の罪せられて行くにわらき

や見よや叫べやと呼はるるかと思へバ其聲に連れて群集の者等の一同にドツと聲を揚げたりける此の女の聲ハ即ちガンノーラが叫びしとい云はでも知らるべし斯くて數日を経した後ハルサンヘルランド公ハ次第に死刑よ遇ふとを恐れ如何ある卑劣ある事とあしても慈悲の所置を受けんとの念を生じ悄然として哀れげに口を送りける折しもガイシチルが時々慰め來り折に觸れ事よ付き羅馬教(舊教)に入るとを勧め若し然らバ命乞をせんと語りけれバノルサンヘルランド公ハ沖に漂ふ捨小舟の援の船を得し心遣して何の思慮をも待たずして羅馬教に入るに決し身の助からんとを願ひけれバガイシチルも之を諾ひけれバノルサンヘルランド公ハ此少しく氣を慰められけるが一夜喬人一人の老婦を導き來れるありノルサンヘルランド公ハ誰なるやと驚き頭を擧げて之を見れば是又ガンノーラあれバ「何故來りし余ハ汝が來りしとを知れり汝ハ余の不幸に乗じ余を苦ましんと思ふからん最早や汝も今ハ満足あらんガンノーラ「妾の來りし譯ハハ君の察する如く一ハ別の事柄あり君ハ不審しく思はれんが妾ハ却て君

を助けん爲めありノルサン「談話あらん去れ去れ」ガソノ「然らば君の妾の言に従へ妾の復讐を好む又妾の宗旨を好む妾の君にソーマルセツト公の殺されしを以て其仇を報ひんと心の甚しと雖も尙其に増したる心あり即ち舊教の爲めに力を盡さんとのとなり君が改宗だにあせば數千の人も改宗あるべし然らば其功徳により私怨を解き君の命を助けんと欲するありノルサン「汝に左様の方ありや」ガソノ「ラ」妾の卑賤の者ありと雖も舊教の人に信任を得る事厚しノルサン「レナードとガソノに如何んと云ふにガソノ「ラ」の領さ妾の用ひ此あて濟みさり君の能く君の心の權にて之を度らるべし一度舊教の部に入らば生命の大丈夫ありノルサン「汝の言の信じ難けれバ余の余の生れあがらの宗旨とせん」ガソノ「然らば宜し既に妾の妾の良心を行ひたれば此上の妾の復讐の念を専にせん此後君に會する處の「マ」ヒルあるべしと云ひ捨て立去らんとするにノルサン「セルランド公の聲をかけ」待てよ汝の言に従はん」ガソノ「君の心の次第にて生命を安價に求めらるる者をノルサン「是非あし汝の言に従はん」と

云ふにガソノ「ラ」の書付を出し此に記名せよ陛下へ出すべけれと云ふにノルサン「セルランド公の如何なる物にやと取上げ見れば舊教に入る願状ありノルサン「セルランド公のつらく見て此のレナードの手跡なり」と云へバガソノ「ラ」の答へ「然りと云ふにノルサン「セルランド公の又「余が此れに印だにすれば生命の助かるべしとの誰が之を証するや」ガソノ「ラ」妾の之ををさそ」ガソノ「ラ」妾が引受くる以上の假令君の首をして斬首臺上に上り居らしむるも之れを助くるの術ありと己の首に掛けたる十字架を示し「此にて証するありと云ふに」ノルサン「ヨ」然らば記名すべしと其書に記名調印をガソノ「ラ」の仕済したりと云ふ顔に「明日の我宗教又誇るべき日ありと獨言しつゝ立去りける翌朝に至ればガソノ「ラ」訪來りノルサン「セルランド公と抱き合ふて其改宗せしむを祝したり而して此の改宗の儀式のセントマヨン禮拜堂に於て行はれ又ノルサン「セルランド公が改宗の事を傳へければサリ、アンドロ、ユー、ダット、レー、ノルサン、ヘ、ランドの弟、サリ、ヘンリー、ゲート、サリ、トーマス、バルマー、等皆一時改宗

の事を乞ひ獨り長子ダットレーのみ之を非難したり其日の儀式最も莊嚴
ありしもノルサンベルランド公のレナードが容貌得意然たるを觀て全く
己の彼に欺かれしとを語りけり

○第廿回 諾撒伯爾蘭士死刑並奇怪老婆自殺

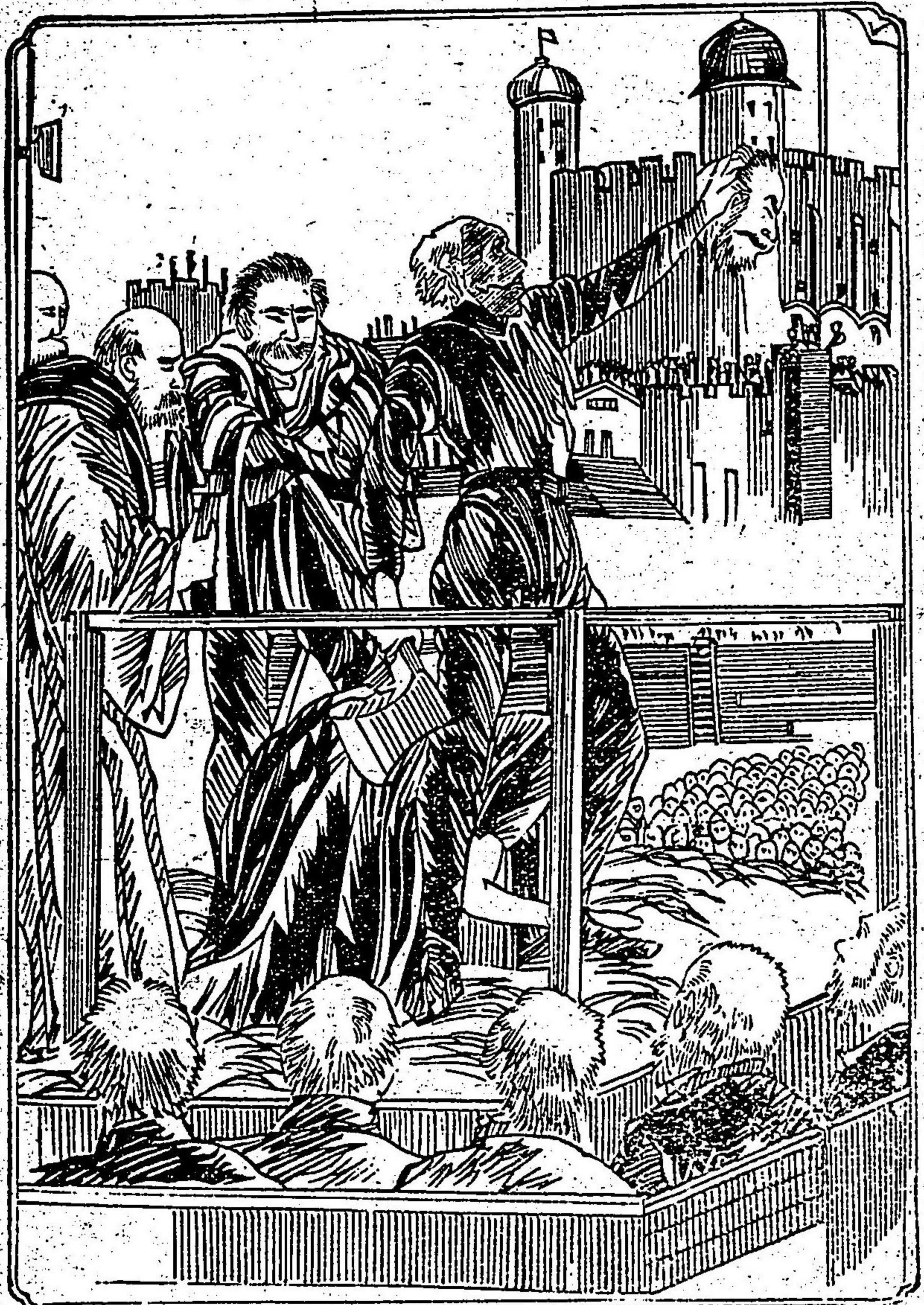
ノルサンベルランド公が舊教に改宗せしより三日の後に至り女王の記名し
たるノルサンベルランド公を死刑に處すべき宣告書のノルサンベルラン
ド公の許へ達し來りノルサンベルランド公の之を見て心大に驚きしが
翻身を見せしとして尙氣なく其施行の日を問へば番卒の情あくも翌朝なり
と言ひ棄て立去りし後にノルサンベルランド公の俄に失望せること甚し
く又口惜しき有様にて只首を低れて人心をも失ひける折しもガンソーラ
ブラオスの黒き覆面頭巾と黒き上衣にて全身を覆ひたる脊の高き怪しの
人と連れ立ち來るにノルサンベルランド公の今しもガンソーラ等と怒り
もし恨もせし時されば屹と居直り烈しく「コノ白癡奴能くも余を欺きしよ
な併しながら此く惡計を施すも汝に於ては毫も利益あかるべし余は斬首

臺上より衆人に向ひ汝等が斯る卑劣ある毒計を施せしと告げ又余が新教
の説をも演すべし余が死期の一言の新教を取りての大なる勢力を有てり
と罵れどガンソーラの落付たる風にて殿下の思想の違ふたり妾の殿下よ
り非難を受くる覺なきし妾の今殿下に示して殿下を喜ばしめんと欲する
者あり即ち君の赦罪狀を持來れりと云ふにノルサンベルランド公の少し
く疑感して「赦罪狀とい」と問ひかくけれバガンソーラ「赦罪狀の即赦罪狀
あり陛下の殿下の一命を助けんと欲するあり然も妾が陛下の其寛仁の
處置を殿下が罪過と共に世に公にせんと欲するが故に殿下の斬首臺上に
於て助けられ給はるべし」ノルサン「果して然らば余は必ず舊教に改むると
を衆人に告ぐべし」ガンソーラ「殿下の意既に然らば精神を安んじて休息し
給はれよ若し妾が言をして虚らしめば妾の殿下と同時死すべきのみ
と此の問答の間の黒裝束の怪者は只默然としてイみけるが」ノルサンベル
ランド公の此者に向ひ「何者を斬首人か將た仇人かと問へば怪者は前に其
上衣と頭巾を取りつゝ「余の」ノルサン「レナードあり即ち君の敵ありと云

ふにノルサンベルランド公の此の一言を聞くや否や其まゝ言も亦く其處に打倒れしが暫して力なげある聲あて既に倒たる敵を尙辱むるは拙劣の復讐にあらすやレナード「余の君を辱めん爲に來りしあらず早や其復讐の障りなく遂ぐるを得たり今來りしは老婦の言を確めんが爲めあり余の君と永世反對し居ると雖も君の一命を失ふに欺きの手段を用ゆる如き鄙劣の事をあさず假令刑斧が君の頭上に輝くも君の一命の陛下の慈悲に因て助かるべしと云ふにノルサンベルランド公の少しく嬉しげに「君の僕心に新ある望を生せしめたりレナード「君の只管改宗して舊敵を守られよ君の遠からずして運命と開かるべし尊重をも得らるべしと云ふにノルサンベルランド公の是迄の傲慢との打變りて急に身を卑下し僕の望は一命だに助からば即ち足れり其上に純ら陛下の忠臣とあるべし僕の傲慢心は全く碎けたり君の言の最早や離敵の語にあら老婦と僕と兩人の不和の全く終れりと覺ゆるありと云ふをばレナードの聞ざる風にて最と惡々しげに冷淡ある機にて「ソハ明日に至りて終らんノルサン「僕の陛下より再造

の恩を受けたれば第一に女王の足下より身を伏せ其次に君の足下に伏し共に其恩恵を謝し併せて君の親愛を願ふべしと云へばレナードの此の腰振漢と云はぬばかりの顔色にて空打仰ぎあぐら僕の親愛の僕の怨恨より恐るべしと云ひ放つにノルサンベルランド公の再びガンノラに向ひ氣を下し余が今迄汝に爲したる悪事を償ふ方便あらば如何ある事なりとも之を行はんと思ふありガンノラ「妾が今迄君に爲したる事にて既に足れり君が今に及んで何事を云はるゝも死せしソーマルセット公を生か返へすと能ふまじ將た斬首臺に蹴がしめたる血の洗ふと能ふまじノルサン「然しあがら今其を償ふの手段と云ふ時ガンノラの心中の復讐の炎燃立ち居れば逆立つ眼恐しく夜叉の如き形相よて何に君の大膽にも其を償ふ手段の出來得るかノルサン「ア、と嘆ずるのみありし此の時レナードのガンノラの處置によりノルサンベルランド公が疑心を起さんとを恐れ忙しく「殿下の此の老婦の言に關はるなかれと此の一言にガンノラも心付き「君にして後悔せし上の充分に君の罪を償ふに足るべし君よ精神を休めて

今夜の幸福を祈らるべし明日に及ばば君の命の女王より奪るるべし
 ノルサン「汝の言に従ふべしレナード」御別れ申すべし明日斬首臺上にて再
 會仕らんと云ふにノルサンベルランド公の強めて笑ひながら併しおがら
 僕ハ其處にて永く御別れ申そやうなるとの願はざるありと云ふをレナ
 ド「ソハ殿下に因るとあり僕の事にあらずと言ひ放てり此時ノルサンベル
 ランド公の衣服の上に飾付けある寶玉を取りガンノローラに渡し汝の僕よ
 り之を受るかガンノローラ「君より何をも受くるを欲せず只一ツの受くべき
 物ありノルサン「ソハ何物ぞ之を云へガンノローラ「明日之を受け申さんと云
 ふにレナードの笑あがらガンノローラを引連れノルサンベルランド公に別
 を告げ室内を立出であがら汝の欲する者の彼の首あらんガンノローラ「如何
 にもレナード「最早彼人の手中にあり汝の充分に復讐し得べしガンノローラ
 「満足せりレナード「今よりモーガールは必用の事を指圖せん汝のノルサンベ
 ルランド公の首を欲せば彼（モーガール）を指と能く談合をべしガンノローラ
 「ソナ受取る迄の妾の生き居る事と得ずレナード「ナコとや生き居らざると



刑死ノ公吐蘭爾伯撒諾

やッハ何の故ぞ ガンソーラ 問ひ給ふ事よ此事を仕済す迄ふの今夜尙爲そ
 べきと多くありと斯兩人の話ながらに連立ちてモーガラの許へと赴き程
 も亦くグラツト塔中のモーガラに住める處に近きしに何事か頻りに音の
 ぎけりレナードの狭き穴より内を伺ひガンソーラに指し見よ彼の内に屈
 竟の男ありて大なる磁石の傍に居り左の片手に只今磨きし計りと思ふ斧
 を持ち右手の親指にて刃の切れ味を試み居り又其傍にの首と肩の乗るべ
 き丈の臺を備へたり如何にも彼の充分の斬首人と思はるゝ耳語さしがモ
 ーガラの斯くとも知らぬ今磨きし斧を側に置んとする其途端に兩人の戸
 を開け入り來れりモーガラの之を見て周章つゝ其邊りを取り片付んとす
 るをレナードの押留め「ナニ左様に心を用ゆるに及ばず汝は明日斬首の用
 意とするあらん余等ハ即ち其事に付て來りしかりと云ひつゝ傍にありし
 臺を指し「ソルサンベルランド公の首が一たび此上に乗らば直ちに之を斬
 り離せよ了解しか如何に モーガラ「了解せり然しあがら何物か其保証狀を
 得ざれば能はざるありと云ふにレナードハサモ重げある金囊を投げやり

「此れ即ち保証状あり尙ほ望む物あらば女王の手づから之を得よと云へば
 モーガールの笑ひあがら「僕ハ此より外は望みあし彼が首一たび臺上に乗ら
 ば一秒だも待す之を斬るべし」其時ガンノローラの又マヤンより賞ひし指環
 をモーガールの前に差出し「妾ハ汝に贈るべき物と命すべきとありと云ふに
 モーガールの指環を受取り其寶石の燦然を見て「君等より賜はりし品の中に
 於て此の品を第一と思ふ目違ひか知らざれども目違ひにあらざる
 べし併しあがら之を得て何事を爲すべきや一ツの首を再度斬るとの出来
 べきにあらすと云へばガンノローラ再びモーガールに向ひ「妾ハ明日斬首臺
 の前にて汝の見ゆる所に直立し居ればと云ひつゝ手眞似にて示し「斯様さ
 る相圖とあし呉れよ是亦了解せるかと云ふにモーガールの點頭て「了解せり
 必ず誤らざるべしと諾したるにて兩人ハ早や此にて事済みたりとて立ち
 去りける
 借もノルサンベルランド公ハ此夜の萬一を僥倖する心と或ハ欺かれしか
 との疑惑心と交も相生じて静めんとすれど心騒ぎして止まらず憂苦の中

に一夜を明し翌れば最早生死の境界に近きけると心も空に悲み居る時し
 も番人の入り來り「此方へ參られよと外の方に連れ行きける其途次にレナ
 ードに會合しければレナードの進み來り一禮して「殿下の御機嫌ハ如何に
 やと云ふにノルサンベルランド公も答禮して「充分宜し此後も宜かるべし
 と思ふありと互に挨拶し畢り漸やくマツヒルに近づきしに其周囲ハ既に
 人の山をあし人の堵をあしノルサンベルランド公の來るを見て一同に
 「満足々々」と云ふ聲を揚げたりノルサンベルランド公ハ屠所の羊の歩みを
 曳きて園の中に入りければ今迄朋友とあし味方とあせし人々の皆嚴しく
 扣へたり是にてノルサンベルランド公ハ早や氣晚れして僅に番人の示す
 處の席に力あげにぞ着しけり其時モーガールの黒き革造りの面を被り其傍
 に來りて斧を杖き「僕斬首の任に當れり宜しきやと問ふにノルサンベルラ
 ンド公ハ「容と云ひつゝ衣を脱ぎ斬首臺の邊に進み近き見物人の方へ向
 ひ「善良なる人民よ余ハ衆人の知る如く今此處にて死あんとす此に於て余
 ハ今衆人へ向ひて懺悔をせし余ハ此の世に生れ出でしより生涯多く悪事

を行ひたれ殊に陛下に拘へる多々の罪を犯したり故に今公衆に向つて其
容赦を乞ふ所然しなから其悪事の余一人の行ひしにあらす余と同一の
人の多くある所然れど余一人を害することを好まねば今一々其名を語ら
ざるべし又舊教即ち真誠の教より罪を得て道と過り行ひを誤りしん全く
虚偽を以て人と欺く處の彼の新教の宣教師の爲に誤られしかり余が今死
期に臨み衆多の善良ある人民に告げんとするに他なし真誠の教の舊教な
り其故の耶蘇より直傳の教あればあり依て余の從來の過を悔ひ此の真誠
の舊教に改宗するあり實に此の舊教の世界無上の良教にして余にして早
く此の教を信じ居たらんに今日此處に來るまじきに真誠の教を奉せ
ざりし爲に此の如き罪を犯したり今余が言ふ處の誠に心の中より出る者
なれば衆人よ幸ひに僕を以て鑑として此の真誠ある舊教を信奉せらる
べし余此に至りて將に死刑を受けんとす衆人願く我爲め祈禱せられ
んとを乞ふと演じ畢りて元の處に立戻り左右の手を胸に當て斬首臺の傍
に立ち寄りける此の時迄もノルサンベルランド公の心中に改宗だにせ

パ己が一命の助かるべき者と淺慮にも頼みなきと頼みたればレナード
の方を頻りに見て目に「未だ助命の沙汰の來らざるか」と問ひけれどもレ
ナードの更に解せぬ素振りにて答ふる様子もなかりけり左レノルサン
ベルランド公の心も心ならずして今や堪へがたく小聲にて「助命の沙汰の
未だ來らぬ」と問へばレナード「未だ容赦の時至らずと簡單に答へしめ
み此の時見物人の一同に「ハンカチーフ」を振り上げけるもノルサンベル
ランド公の之を見て是ぞ我助命の沙汰の來りしあらんと思ふに甲斐なく
是レノルサンベルランド公が先きの血に染みたる手拭を振りしに連れて衆人
が又斯く手拭を振りしければ今詮方なく斬首臺の傍に跪きける去れど此時尙
や卑怯よもレナードが助け呉れんとを頼みレナードの方を横眼に眺めつ
つ身と斬首臺の方に延べければ斬首人の臆で斧を振上げしにノルサンベル
ランド公の此時こそ我助命の沙汰の來る時ありとツト首を臺の上に載
するや否や斧の電光石火の如く閃き來ると見えけるが忽ちノルサンベル
ランド公の首の前にぞ落ちにける時にモイガの直ちに之を左手に指上

げ高聲に「反逆人の首を見よ」と示しけるノルサンベルランド公の如何に己が罪の爲めと云ひながら悔しくや思ひけん目と閉ぢずして首のみおがらに双眼を開きて白眼けるゆゑ見物人の之を見て驚々と呼はりける其聲の中に一聲キヤツと云ふものありしが其處にガンノーラの血汐に染まりて死し居たり(前段の文字に付圈ある所を見よ)

○第廿一回 西使離間策并女王嫉妬

一事終つて一事起る往ての歸る浮世の常茲にノルサンベルランド公の倒れし後復た一の變事こそ始りけれ女王マリーの始め入城の際其罪を容して貴官高位を與へたるコイルテチーの容貌衆に勝ぐれしに心動き其後の常に心頭に其念を絶たず又コイルテチーを容せし時の舉動を觀て餘の人人も女王こそコイルテチーを其夫に撰ぶべしと思ひけれバ女王の心愈固く其後のコイルテチーの寵愛より誰とて及ぶ者無きに至れり此のテチーの系族の王家の血統と云ひ品格氣韻両あがら高ふして容貌優美閑雅あり加之學問に富み佛西以等の語に通じ舉動學藝凡べて他の諸貴顯に

勝りけれバ女王の夫とし又王冠を戴くも恥づべきとさく又不理のともありし只未だ歳二十一の春を迎へ其間十四年の永き歳月を牢中に閉籠られて居たりけれバ世事に疎くして人に欺れ易く又世の事を珍らしく思ふ心の甚しく殊に妖姚たる婦女の優言を聞くやと牢獄中にありての夢にだも覺ぬざるをかれれば終に女色の迷雾に溺るゝとよりして大なる過を仕出すに至りしこそ是非あけれ然バシーモンド、レナーの女王がコイルテチーを寵愛し隨て他の人々もコイルテチーに取り入り自然にコイルテチーの位置高く權威の附くを見てコイルテチーの容易あらじと一人心を惱しける开のレナーが心中に始より女王に己が國王ナヤイレ五世と結婚せしめんと計りしゆゑに此さまにて行かバ己が計の齟齬せんとを恐れてあり去ればレナーの如何にもして女王とコイルテチーの間に不和を生せしめんと企てける故己れ先づ類りにコイルテチーに取り入り互に親愛の意を示せし後遊樂放蕩の事を勤め女色を以て其心を惑はさんとせりコイルテチーの一度其樂味を覺ぬしより天上天下此の上もあき快事と思ひ欺るゝとの露知

らず始の女王に憚りて潜々にあしけるが終に公に淫樂に沈りける女王も始の程の若年の血氣ゆると之を問ひもせで捨置れしが益々慕る淫樂に今のとて人も多く有るべきにレナードに頼み之を諫止せしめければレナードの如何で之を諫むべきや益其勢炎と煽りける故コイルテチーの荒樂の愈甚しくぞ見えにける之を見てデノエールスガール等ハ心を通まし交々諫を入ると雖も終に聴くべき氣色あし去れど女王マリイの全く壯年の故と諦め大に之を咎めもせざりける故レナード之を見て斯ての尙一層甚しき大敵を此の戰場に出さざるを得ずと即ち女王の妹ある公主エリサベスを以て之に當てたりエリサベスの容色遙に女王に立勝りて美ありければコイルテチーの心の忽ち之に移りしがエリサベスも亦コイルテチーが美男子あるに心の中に最愛しく思へども流石姉君マリイの手前を憚りて控へけるにコイルテチーの女王の嫉妬心を起さんことも心に留めおとしきに至つての女王マリイの前にも憚らずエリサベスのとを稱譽するに至れりレナードのユリサベスが心如何にと探りけるにエリサベス

も心中に甚だコイルテチーを想ひ思へども只女王を憚る有様なれば早や仕濟したりと思ひ時々コイルテチーよりエリサベスの方へ飽めける玉章を送らせける此事何日しか人にも知られ其風評の高ければ兩人の中を女王も始の疑ひ終に嫉妬の念止みがたく此の兩人を責詰りて其腹を愈せんと考へける一日コイルテチーの女王の召そに從ひ其前出けるに他に侍臣も居る又女王が已を待する處置の常日に變りて冷淡されバコイルテチーの不審に思ひ女王の機嫌を取らんものと欲し女王の前に進み身を伏さんと爲せしを女王の急に押止め君を最後に招きしありとの一言にコイルテチーの此の一言の不思議あるを怪み最後とやと驚くを女王汝暫らく黙し居れよ今日迄朕が汝を如何様に愛したるも今全く其情變じたれバ之を汝に語らんが爲めに茲に呼出せしあり今早や朕が汝に與へたる寵愛と榮譽を思ひて悔悟せしめん爲めにあらず恩義を知らぬ汝が不實を責め以來以後永く朕が面前より放逐せんと欲するありと怒り且つ怨み言を聞てコイルテチーの始て心に其れと悟りしが素知らぬ様にて如何

にして陛下の御意を損じ給ひしやと云ふに女王の少しく眼に角立て「如何にして未だ汝の知らざる如く云ふと雖も朕の疾より之を知れり初めよ
 汝の醜行を知らざるにあらねども只是れ汝が血氣の過りと思ひ又汝の
 朕を愛するの精深かるべし(此の時女王の聲をふるはし)と思へばこそ答め
 もせざりしあれと云ふ時コールテチーの女王の愛を買せんことを思ひ身
 を進め陛下の臣が陛下を深く思ひ奉る誓言を信じ給ふかと手を出し女
 王の手を取らんとせしを女王の忙しく手を引きつゝ如何にも早や信せざ
 るあり疾く此の場を立てよ汝の此の先向や朕を辱むるの振舞をする勿れ
 汝が他の女を愛せざりせば此の女王の冠の汝の頭上にありし者をと云ふ
 にコールテチーの益うやくしく陛下の臣を太く惡み給ふを休めさせ給
 へ臣の今日まで如何ある振舞ありしも一命の陛下に奉りてありしと云ふ
 に女王の早や堪り得ざりしか大に怒らせ給ひ「ッハ虚言なり汝の朕が妹を
 愛するならずやと聞てコールテチーのハット思ひけるが顔色と取直し「コ
 へ思ひ寄らぬとを云ひ終らざる中に女王の益怒り「汝の強情にも之を知

らぬと答ふるか汝の朕の面前に於て彼の女に情あきと云得るかと責め
 られてコールテチーの如何にも之を云ひ得べし臣の未だ公主エリサベス
 姫に向つて少しも親愛の情あると言しとあしと云へば女王の威猛高に奇
 らせ給ひ「汝の益虚言を云ふ者なりと云ひつゝ一の紙面を出し此の何物ぞ
 汝より我妹に送りし書あらずや汝の此中に何と認めしぞコールテチー「ッ
 ハ全くレナードが所爲あり女王「此の汝の手跡あらずやコールテチー「臣が
 認めしものあり女王「然らば汝の朕を欺かざるかコールテチー「臣の陛下を
 欺かじ全くレナードは誤られしあり臣が陛下を愛し奉る情の充分にして
 滅せざるありと云ふに女王の恐嚇の口調にて「君よ君よ汝の朕を欺かんと
 する勿れ汝のヘンリー八世の女の無罪の者を怒ると思ふ勿れコールテチー
 「臣の陛下の逆鱗を畏敬せり只願く其紙面のレナードは誘はれしもの
 と云ふとを察せられんとを云へば女王の少しく嘲る形にて何とも云は
 ず只何にとあく苦笑せりコールテチー「臣の臣が愚蒙あるとを知れり然れ
 ども願くば陛下の臣を不實あらざる者と思召し給はんことを又臣の陛下の

面前より放逐せらるゝとも又如何ある罰に處せらるゝとも曾て恨み奉るゝ
 とおし只陛下を愛し奉り居ると云ふと信じ給へんと云へば女王「汝
 の縁り返へし愛々ど云ふと雖ども朕が眼に汝の愛を見る事能はず朕の
 男兒を以て愛と人との兩つに分つ事を好まざるあり汝の如何ある心にて
 斯る紙面を朕が妹エリサベスに遣はせしや コールテチー「臣が先きに言上
 し奉りし如く全く欺かれし爲めに臣の悲むと雖ども已が犯せし咎あれ
 ば其罪を受くべしと其言甚だ熱心にして誠に心中より出し如くなりけれ
 ば女王も少く心解て「汝の信實を斯く云ふかとの仰せに コールテチーの満
 面に誠を表して如何ある誓をもおし候べしと云へば女王の不圖思付し狀
 にて「朕の尙吟味すべきとあり コールテチー「陛下の至當とおし給ふ處置の
 如何あるとにてもと云ふ時女王の鈴を振り近侍を呼び公主エリサベスを
 召せと命じたり コールテチーの之を聞き大に驚き思はず「公主エリサベス
 姫をと云へば女王の縁返し縁返して「公主を公主を朕の彼の女と汝とを引
 合さんとするなりと云ひつゝ再び近侍に向ひ「大法官及び以西佛の公使に

此に列座あらんとを乞へと命ずれば近臣の命を受けて出で去りける コー
 ルテチー「陛下の如何なる御心にや知らねども臣の多くの公使の前にて辱
 しめられんよりの寧ろ早く死せんと乞ふと云へば女王の嚴き貌にて「朕
 の一の情人の不信を罰すると能はざるも臣下の不順の必ず之を罰すべし
 汝我命に背きたれば今罰せらるゝも一言の言解くとおからんと此問答の
 内に公主エリサベス及び大法官のガールテチー公使のレナードデノエール
 大等近侍の案内に連れて入り來りレナードのコールテチーが已に女王
 に怒られしを早くも見て取り獨り心に莞爾として居たりける時に女王の
 ガールテチー等に向ひ各其名を呼び「結婚の事に付種々朕に勸むる者ありし
 も諸卿の既に知る如くと云つゝ「コールテチーを指し「此人を擇び之に爵位
 財産を與へたりと云ふにガールテチーの始より女王が氣色と其言の何とあ
 く穩かあらざるを見て大に心を痛め今女王が言の畢るをも待たず「臣等の
 能く之を知れり實に陛下の御擇の國家の爲め人民の爲め大に幸福を與へ
 たりと云つゝレナードに向ひ「君等も左に思ひ給ふらんと云へばレナード

の表ふり拜しけれども口にて一言なく控へたり。デ、ノ、エールス「誠に此の結婚の賀すべきのとあり。女王「卿等よデボンシル伯（コールテチー）を指して云ふ（朕の言に背きたり彼の信實の誓を破り彼の己に戴ける冠を弄て他の若き美人の色に溺れ彼をして王位に昇らしめんと欲する人を捨たりと云ふ時ガリシナルデ、ノ、エールスの兩人言葉齊しく然る事いひまじと云へば女王の嚴格に卿等の違へり彼自ら唇上にて誓ふとを聞けと云ふにデ、ノ、エールスの側目にコールテチーを見ながらガリシナルに向ひ「彼の君に於ての斯る狂人の如きとあるまじと思ふ如何にやと云へばガリシナルの答へて「臣も斯く思ふありと云ふ時エリサベスの己に女王が一言に面色青ざめやうやくに其席に堪居たるのみ女王の此様お目を注ぎ妬心益盛となりエリサベスに向ひ「伯の汝に親愛の情を轉じたりと云ふにエリサベスの堪へずして「陛下よと云かけしを女王遮り止め「静にせよ汝の彼の伯と朕との約束を知りながら反つて情を通せん」とせりと怒るを聞きコールテチーの「エリサベスに氣の毒と思ひければ「陛下の何に因て斯く宣ふや全く公主

の知りし處にあらず只臣より妄りに之を挑みしのみ臣一人の罪あり。女王「汝の彼を庇えんとすれど朕の之を欺かれじと云ふ時エリサベスの元來氣力の勝し性質なれば心も勃然と怒を起し「是れ伯が罪ならんを全く賤妹が罪にして其耻辱の賤妹が被るべきありと答へたり。コールテチーの「又「然らば然らず其罪の臣一人あり陛下に望む處の直み其罪を申渡れ。公主として其冤罪を死れしめ給はんとを乞ふに女王「此時苦笑し「あがり「然り「朕の途に汝等をして自ら白狀せしめたり朕は今迄の汝等互の愛情如何にあらんと疑ひしに今全く両情の親愛あるとを知れりと云ひつゞ又コールテチーに向ひ「汝の何の願ありや之れあらば之を望むべし。今汝に罪を申渡すべしといきまき給ふをガリシナルの「陛下よ少時猶豫を與へ給へ一旦申渡されたる上の再び之を取返すと能ふまじければ責て一週間の時日を延べ給はん事を然らざれば廣大ある陛下の明德も僅かに一瞬間の疎暴の事の爲めに毀傷し大お人望を破壊して治世の策を敗失せるとも計るべからざればあり。デボンシル伯が行の容すべからざるの固より臣等が知る處あり

れども伯の爲めにあらずして君の爲め國の爲めに伯に寛宥の御處置あらんとを願ふあり臣の伯が陛下と親愛し參らする情の一身を以て証すべしと云ふにレナードの漸く言を出して他より左右を言上するより伯をして自ら十分に述しむるこそ宜けれと之を聞くや否やコールテチーの身を女王の前に伏し臣をして十分と思ふ處を述べしめ給へ臣の今日迄の疎暴を自ら責め悔るあり然れども王冠の地位を復せんと望まざるあり只陛下を愛するの情の已ざるありと云ふに此の時女王の心の漸く動きし狀よて「汝の言を信實と思ふありと云かけしをガイヤチルの其語を次ぎ臣が固く之を証すべしと云ふに之よ連れて」デノエールス「臣も固く之を証するありと云ひ又コールテチーに向ひ小聲にて陛下の後悔の心動きたり君此の機を失ひ給ふ」と云ふをコールテチーの首肯あがら女王に向ひ陛下と暫く秘密に談話せんとを乞ふ然らば臣の全く陛下が疑惑の心を解き申すべしと云ふに女王「其望の叶ふまじ今日の不和の既に公然となりしゆゑ和熟も亦公然たらざるべからせと云ふ時レナードの小聲にて獨言するやう斯る

事の出來得べきか又斯る事を出來得さしての叶はざるありと云ふに女王の大驚に我政府のとに關しての諸君の忠告に従ふべきも只朕が心中の一段に至りての朕が心の儘に隨ふより外かしと云ひつゝ又コールテチーに向ひ「此等の紳士及び朕が對手たる妹の面前に於て汝に命すべき事あり汝の朕を欺きたり又汝の行の我妹と惡道に違きたり此の如き罪を犯したれども朕に對しての親愛の情の離れざりしかと此く女王の言かけしときレナードの恐しき眼にてエリサベスとコールテチーを見遣りたりエリサベスもコールテチーが一言にて其身の浮沈も定まると思へばコールテチーが如何に如何にと待にける女王の益聲を高ふと汝の之を確むるや否やと問ひ訪られコールテチーの流石にエリサベスの前をも憚れば急に然りとも答へられ去りて之を云はざれば其身の忽ち大罪に處せらるべし如何に答へば宜からんと躊躇ひ見ゆるをデノエールス小聲にて之に注意して附豫する勿れと示し諭すおエリサベスの又心を痛ましむる事の餘りト過ぎければ其身の其處に倒れんと云る漸くレナードに又へられてしま

りけり女王の之を見て不興ある面色にて宮女を呼出しエリサベスを介抱せしめコールテチーに向ひ「汝の是にて容すべしと言ひけるにてコールテチーの此の一言を聞くや否や直ちに身を投じて謝したる其喜びの如何あらん只哀れありしエリサベスにて我情人の姉君の威權に迫られ再び心を翻じたる如きを見ながら宮女に扶けられ外の方へと連れ去れし心の中の悔しさの推し測られて憐れあり女王の「びコールテチーに向ひ「朕の己に一身の事濟みたり是より後の王國の事に移りて議すべきとあり故に汝を此より止むると能はず又デノエールス君も同じく退かるべし只ガージテル君とレナード君に少しく相議すべき事あれば其の力を借らんと欲するありと是に於て手を出してコールテチーに接吻し「朕の一時間の後に花園に行きて相待つべしコールテチー「必ぞ其處にて謁見仕つるべしと女王の前をデノエールスと共に退きける其途そがらデノエールス「君の危難の處を脱れたりコールテチー「全く王冠を得るの機を失ひたりと思へり斯様の事の起りしも全くレナードが處爲なり僕が一時間とて生のあかしの間

必ず之が仇を報ゆべしデノエールス「最早君の勝とありしゆゑ現在の地位だに保てば後レナードの策を防ぎ得らるべしコールテチー「一時間を持たれよ我如何に仇を報ずるか其有様を見られよデノエールス「注意注意謹めよ、君の餘り疎暴あるがゆゑ敵の爲めに陥れられしかり去れば爾後を能く戒めよコールテチー「余の一命を失ふも彼を容さざるべしと兩人は此く物語しつゝ外の方へ赴きける

却説女王のガージテルレナードの兩人を相手として舊教を回復するに付種々の議論ありし未遂にガージテルが願ふよりジャンの罪を容し之を改宗せしむるとを許しガージテルとレナードの兩人の之を承り各退出しける夫れよりレナードの獨り某處を過ぎけるに圖らずもデノエールスとコールテチーに行き合ひけるコールテチーの影を見るや否やツカ／＼と其前に進み寄り「余の君を待てりと云へばレナードの答へて只今の折り悪く外に所用あればと避けんとさればコールテチー「問答の無益なり君の両面の悪者なりと罵りかけたりレナードの「コールテチーを卑め

る状にて「君の余を何故に悪人と云ふか余の更之を覺ゆるるありと答ふるにコールテチーの其己を卑むが如きに堪へ得ず手套を外して之にてレナードが顔を打ち之にても尙ほ君の覺候はずやと云ふにレナードが顔色の忽ち朱を濺ぎ劍の柄に手を掛け余は附き來れと云ふにコールテチーの尙ほ罵りて「君が余に與へたる耻辱の忽ち其身に報ひ來るとを知られずやと云ふをデノエールスの兩人の中を遮ぎり斯ての陛下の怒を起すのみ其禍や測るべからずと止めたりレナード「余より挑みしにあらず又伯の其言を以て陛下を欺きし得かれバ此まゝ伯を生存し置かんに如何ある識言をもて余を陥れんも計るべからずと云ふを聞てコールテチーの怒の色面に滿て齒の根も合はざる聲を振りあげ「無禮者愚蒙人汝の汝が生國の不實ある性質を悉く汝一身し集めし者あり早く余に附き來れ然らば多く糧を食らはすべし其躊躇するの汝が國民の卑怯ある如く汝も亦暗殺もて仇を取らんと計るあるやと云ふレナードの最と傲慢に「卑怯といふ君自らを云ふあり若し君が心中眞に決闘を欲せば疾く勝負を判りべきに在り

くして徒らに問答に時を費すの陛下の來りて救はんとを頼むにあらずやコールテチー「余が心の然る卑怯の考へあし英人の敵に打掛て又敵に空しく手を止させる卑怯あしと言ひつゝデノエールスも向「君の此處に在て証人たれ余の彼と決闘を行ふべし余の彼に少しも慈悲と與へざるべし又彼よりも少しも慈悲を受ざるべしと云へバデノエールス「余の曾て邪魔せざるし君等の其思ふまゝ充分に決闘を爲し給ふべし然れど余の決闘人の一人たるを乞ざるなりと云ふにコールテチー「ソハ君の意の儘なりと云了りレナードに向「速に來れ汝の余が與へたる耻を思出せよと迫りければレナードもデノエールスに向ひ「君の後此の決闘の余より付懸しとにあらざるを証せられよデノエールス「君等の何處にて之を行とんと欲するやコールテチー「王宮の園中にて行とん彼處の他に妨げを放す人かからんレナード「斯く定むる上一時も早く決すべしコールテチー如何も三人の足を速めて園中に赴きける時に矮人ショットの計らざる此處は此の有様を見けるが木蔭に立隠れて其結局如何にと伺ひ居たり三人の其とも知

らすレナード先づ上衣を脱弃て身構へればコイルテチーの大い氣を焦ち
身支度もせず其儘に直ちに立合ひてヤットの一聲を合圖とし兩人互に扱
合はせ暫しの間切結びしがレナードの元と擊劔家なりしかバコイルテチ
ーの柔弱なる状と侮り何程の事やあらんと思ひしよ之に反してコイルテ
レーの一命を失ふも一刀あり仇を斃すも一刀あり我此の仇に一疵だも負
せでの止べきやと思ひ詰たる一心の打込む太刀筋最と鋭く遂にレナード
の敵の一太刀を受損じて腕に傷を受たりけり是よりレナードも太刀筋に
かゝはら老滅多打に打ち込み來るにコイルテチーの技も力も此敵に及ぶ
べくもあらざれば時を移してハ叶ふまじと思ひ諦め早く勝負を決せんと
打込みく息をも續がずに闘ふたれば流石のレナード追々に受身とあり
て一足づゝ應ひながらに後退りしけるが運の尽にやレナードの木の根に
臥きて仰向にドウと討りに倒れたりコイルテチーの聲を揚げ「最早一打か
りと叫びければレナードも共に叫んで打てよ余の負けしにあらせと呼ん
だりけりコイルテチー「余の人の危に乗せ老汝疾く立つて再び尋常に勝負

と決せよと云ふ中レナードのガバと跳ね起き早くも身構へして「君の信實
の反て君の仇とあるべし能く君が身に用心せよと罵りて闘ふ勢兩人共に
前又増して最と花々しく見ゆにけり矮人ショットの始より此の有様を見居
たりしが今や兩人が勢の既に危急に迫りければ心の中に思ふやう斯る場
合を救ひ置かば後女王に取入る手段ともなるべしと早くも狡猾心を起
せしもの己が力にての迎も及ぶべきにあらせマゴグの大力こそ善けれ
ど小股ながらも宇宙を飛んでマゴグが許に走り行き言葉短に云々と事の
大略を告げられバマゴグの早速又承知して鎌鎗やらの物を携へ歩む股さ
へ大きければ忽ち決闘の場所に來り見るよ兩人の勢益々劇しく今マゴグ
の來りしをも知らせして一上一下互に必死と闘ふ處へマゴグが雷の如き
聲にて「双方共よ戈を措けと叫びしも此聲如何でか耳又入るべき兩人尙互
に切結ぶにマゴグの今の詮方なく一聲呼んで兩人の中に跳り入り兩人の
腕を捕へて左右に押し遣り寄り寄り倒さんと仁王の如く突立てる其有様の
恐しき形相云ふべくもあらざれば兩人不意の妨げ入りしどマゴグが斯る

有様に驚き果れて立ちたる儘左右あき寄りも得ざりける斯く闘の止みし
 を見て矮人シットの此場に飛び出で剣を抜き少き体を殿しく「君よ拙
 者の女王の名代にて来りしあり女王が副君に武器を拙者に渡せと命せり
 と此く云つゝ帽を脱ぎ容体を繕ひコールテチーの方に進み其剣を受取んと
 ぞコールテチーの此奴無禮者と一度の怒りしが又其矮人の可笑さにコ
 ルテチー「余が之を拒まば如何にかすると云へバシット」拙者の強て受取ら
 んとのせずと答へたりコールテチー「然らば汝に渡さんと差し出すシット
 の剣を受取り拙者の君の大量あるとを陛下に申上んと云ひつゝ又レナ
 ードに向ひ「君よ君も剣をお渡し候へど云へバレナードの剣を地に投げ出し
 「之を持行け最早此の闘の終りたりと云ふにコールテチー「未だ此の闘の終
 らざるありと云ふをシットの聞き咎めマゴグに向ひ「汝此の伯の言を覺
 居よ伯の未だ闘を終らずと云ふ拙者の必ず陛下に之を上申すべし又拙者
 の必ず此の商人を捕ふべければ汝固く兩人と守り居れと云ふにコールテ
 チーも始めのシットが矮少にして其狀の可笑ければ之に戯れ居りしが其

無禮の限あければ心頭あ怒を起し「此無禮者必ず罰すべし忘るあよと怒る
 をシット一向に恐れもせずマゴグに向ひ小聲あて「彼伯よの闘るべから
 ず伯の後に我等の處爲を好まべし如何あるとあるも兩人を動すあかれ今
 より汝に賞を取らそべし豫約そべしと云ひつゝ又コールテチーの傍よ赴
 き低聲に「拙者の殿下危急の場合に來り之を助け申せしあり敵の刃の己に
 殿下の胸前一インチ許の處に至りし時に拙者の助け申せしありと云ひけ
 れバコールテチー「黙れ小兒と叱りたりシット「拙者の此の事を陛下に上
 申せん爲め又行かんとすマゴグよ汝の此の兩人を連れ來れと云ふをコ
 ルテチーの若干金を入れし財囊を投出し暫く待て先づ此の財囊と取られ
 よと云へバシットの大に怒りて否拙者の賄賂を取らざるありと云ひつゝ
 マゴグに向ひ兩人を静むるの汝に任すべしと云ひ捨て宮殿指して走せ行
 きけり

○第廿二回 前女王與俄爾尼耳論宗教

前女王シヤンのブリツク塔に幽閉せられ夫ダットレーとの交通を絶れ心

を慰むる由も亦く悲哀に心を痛しむるより外も亦かりしが心亦半番の
 シヤンが溫柔婉孌あるに徐るに憫を催し何事につけ心優しく取扱ひて折
 に觸れてハダツトレーが音信を通じあとして其心を慰めければ始の最と
 ど憂き涙も身も浮くばかりに無情浮世をかちたりしも終に漸く心も
 落付て此よりの只管最期の用意に餘念も亦く日々朝夕上帝に祈るのみに
 て悲哀の容を顯はさず心寛に見ゆるが茲に女王の師と仰がるフヘケ
 ンハムの時々此處に訪來りて頻りにシヤンに改宗の事を勧め若し改宗の
 事あらば一命の必ず買ひ得らるべし去ればノルサンベルランド公も既に
 改宗し其息ダットレーも亦改宗しければシヤン若し能く改宗せば一家の
 性命の悉く安穩もあるべしと説き勧めけれどもシヤンの少しも肯ずる色
 なくノルサンベルランド公の改宗の止むを得ずして然せしにて本心より
 の改宗にのあらずダットレー君の如きも亦同然あり妾に於ての假命令を
 取らるゝとも苟にも改宗すべしとの云ふまじ只願くの最期の來る日まで
 平穩にあふしめんとを一向に死を憂ふるの容子見ゆる覺期を定めし殊

勝の体に終にの坐るに感嘆に堪へず其後復改宗のことを申出でを只訪來
 りての其心を慰むるのみありしが一日來りてシヤンに云ふやう「御身ガ
 シヤルとビユーチヤンア塔に於て宗教の問答を做し給ふべし其末に御身
 若し敗を取りたる上の舊教に改宗すべし其議既に定まりたれば御身も其
 用意おし置き給はれと告げればシヤンの入ぬとこの思へども一身ぶに儘
 さらぬ幽囚の上あれば如何にも心得侍りしとして其日の來るを待ちけるが
 早や其日にもありければ番卒來りて案内しビユーチヤンア塔へ連れ行か
 れけり斯くて禮拜堂に至りしに其所より己に夫ダットレーも居合せ彼の
 レナードの最と恐しき眼にて此方を白眼で控へたりダットレーのシヤン
 の來るを見て直に傍に來り神壇の所に伴ひ「卿の未だ恐るべき事を見ざる
 かと一の石塔を指し示しけるにシヤンの何事ありやと之を見れば一の新
 しき塔ありて其表面に「ノルサンベルランド千五百五十三年八月廿三日死」と
 記しありけりシヤンの一見するや否や忽ちアット云ふて其處に倒れ暫し
 人心も付かざりける如何に覺悟したるとこの云へ未だ此くのあらじと思

ひしに是を見て又今更に驚きて氣を失せしも優しき女性の心にも理りありと思はれて見る人哀れの涙に咽ばぬ者のあかりける良やありてジャンの人心付きダットレーに向ひ「何時斯くの淺間敷狀に變り給しやと問ふにダットレーの涙を拂ひながらレナードを指し「此に父上の首を斬りし人ありと云ふにレナードの傲然として「余の今より三月前にメルサンベルランの此に入るべしと豫言したりけるが今果して然りしと最悪しく述べ又云ふ君等も改宗せざれば凡て此の例に倣はるゝありと云ふにジャンの見るも忌はしとしてレナードにの答も奇さで只管夫ダットレーに改宗の無道にして益なきことを説きたりしがダットレーの甲斐なきを悲みける中に早や問答しジャンの獨り心中に夫ダットレーの甲斐なきを悲みける中に早や問答の席も備はりければガリシナルジャン各其席に付き宗教の問答始りける斯くてガリシナルの頻りに新教の眞誠の道にあらずして眞誠の通の舊教あるを論じジャンをして屈伏せしめんと計ればジャンの又眞誠の道の新教にありて舊教の大に道理に背きざる非法の教ありと論じ少しも涙み

かく言語清涼にして聴く者の耳を澄しめたり最後に至りて一段力を入れ言語正しく妾の新教を以て人と成りし者あれバ今亦新教を守つて死するに至當の事と思ふなり舊教の勢力盛にして新教の勢力衰弱し此憫れむべき時に當つては是れ反つて妾が信實を顯はす時にして妾等の身に取りて此の時斯の道に殉するの素より必用にして妾の今斯道の爲めに殉死せし人の態に加はる事を得るの内に大に榮譽の事と爲して少しも恐るゝとあし且今妾の殉死するの後世に至つて新教の道あ於て大に助けとあるべし故に妾が心に最と快く覺ゆるありと云ひつゝ傍に飾りありし經典を指し此の上にも我が宗教を建てられたり汝の宗教の土沙の上に設けられたり去れバ汝が宗教の脆く消行くの元より明ある事ありと雖とも我が教の之れに反して固く永存すべしと信す此の眞誠の巻中に我が眞誠ある教を悉く記しあり我が造化主と妾との間に此外に物の入るべきあし將妾の之を欲せざるありと演述したる其様のジャンが滿腔の熱血を表出したりと思はれて聴く者此の一言に驚歎しそ皆々思はせも賞賛の聲を揚げ感涙に咽

ふもあり又此の問答を初より書取り居たる書記も筆を止めて涙を拭ひ暫く手を動かさず平生の砲丸其前に落來つて發するもピクとも動せぬ狂惡大胆のレナードもシャヤンが信實熱心にして教への爲に一步も其道を枉げざる膽略も感歎したりけん顔色動きて心中に九分の恐れを生じたる様を顯はしより時にガリシヤルの徐ろよ云ふ様「双方の議論の早や是よて終りたり君の退かるゝも隨意あり君が永く此に在つて述べらるれば其議論中我舊教の徒の心を動かすの恐れあり去れば此の議論の此にて止むべしと云ふに「シャヤン」然らば此の議論の汝達の敗したるや「ガリシヤル」僕も君の身に向つて寛裕の處置を與へんとせしも最早行はれざるに至れりと云ふに「マツトレイ」のシャヤンの前に跪き卿の如何にも今日の議論に打ち勝たり余も從來の教の飽迄變へざるべし卿の實に新教の貴と實と云ふべしと云ふも「シャヤン」の急ぎ大と起し「今日」の如何にも勝利を得たりと云ひつゝ又「ガリシヤル」に向ひ「君が心の次第に任すべし或の半又の斷首場君が思ふ所に伴ひ行かるべし妾の少しも死を厭はざるあり死の恐れざるありと此の

語の即ち今日の終りにて「シャヤン」の夫「マツトレイ」と抱き合ひ悲しき別れを告げ、れの「マツトレイ」も固く改宗せざることを誓ひ各番卒に導かれて其幽所々々へ連行かれける

説話兩岐コルモンデレいの「マツトレイ」が塔中へ囚はれし折同時に塔中へ從ひ來り「ナンスボーヤ」塔に幽閉せられしが程おくノルサンベルランド公が刑に處せられし後充分に自由と迄に「行かざれど塔中のみの自由に歩行する」とを許されければ「シャヤン」も「マツトレイ」あどの身の上の事心に介らぬに「のあらねども皆囚れの身ありければ如何んとも詮術なしと思ひ諦むれど此に晝も夜も忘れられぬ「サイスリー」の身今如何にしてやあるらん先づ石室の料理人の許を訪は、其様子と知り得られんと其處へ赴きしに料理人夫婦の大に「コルモンデレイ」が恙あかりしを喜び祝しけるゆゑ「コルモンデレイ」も此夫婦が先きに變らず愛想あるを喜び挨拶畢りて先づ「サイスリー」の問出し「サイスリー」嬢の恙あくる居られぬやと云へば母の「ポテ」ン「シャヤン」料理人の妻なり」の忽ち愁を催し彼の先きに「シャヤン」に伴ひ行かれ

しより何の音信だもあく其後ジャンの此の塔中へ囚はれ我娘の獨シオン
 ハウスに取残されしと聞き如何にやして居るらんと思案に暮れ我夫の迎
 ひの爲めに行きけるも如何ある者の仕業よや我夫よりの頼まれありと騙
 りて娘を何地へか早や連れ行れし後なりしと話しあがらもはらくと母
 の涙を流しけりコルモンデレーの内に驚き必竟ソハナイト、ゴールの仕業
 あるべしと語ればポテンシヤ一のうあづきて「妾も左に思ふあり去りあが
 ら彼ナイトの塔中を出しとなきと聞けば或の他の悪人の仕業にやあらん
 コルモンデレー「彼奴の半番の身分あれども女王の羽翼ども云はるレナ
 ードの氣に入り居れば如何あるとを爲せしも圖られざるありと此く兩人
 の話の中へマゴグ入り來りてコルモンデレーのありを見て大に喜び互に
 語と交ゆればポテンシヤ一の愛き心の中なれど人々の爲に料理を爲さん
 とて立ち去りあがらコルモンデレーに向ひ「君の未だマゴグ殿が妻を迎へ
 しとを知り給はぬかと云ふにコルモンデレーの「マゴグが婚姻をと驚けバ
 ゴグ「君のみならずマゴグの婚姻にの皆驚きしと云ふ時料理人も出來りコ

ルモンデレーの幽囚を客されしを喜びコルモンデレー君よ僕の自由
 を喜ぶあり君の今日の有様の奇麗なる鳥の籠中より放されて自由に飛翅
 ると同じかるべしとこれに囚みて今日の美なる鳥肉にて馳走仕らんと云ふ
 にコルモンデレー辱あしと之を謝せば料理人の又云ふやう「我々の能く用
 心せざるを得ざる事あり即ちナイトの事ありコルモンデレー「如何にも彼
 の今日飛鳥の落る勢あるレナードの信用を受け居ればいと恐ろしき者あ
 りと語る時しもナグとショットの二人も來りコルモンデレーを見しがシッ
 トの矮き軀をコルモンデレーに擦り寄せ其恙なきを喜び祝するにナグも
 太息を吐き一別以來世の變遷のとより女王ジャンの廢されノルサンベ
 ルランド公の殺されサイスリーの行衛知れなきありし事どもを述べて歎息
 しつゝ此外に最も人の心を悩ませし一事あり即ちマゴグが妻を娶りし是
 ありと云ふにコルモンデレー「その事を今もゴグ殿より聞きしが定めて君
 等の心に不満あるべしナグ「誠に快よからぬとあり左れど兄弟なれば詮方
 もあしシット「マゴグの婚姻してより精神を失ひし如く用に立たぬ人とあ

れり僕に彼の女のとを任せさば彼女とマゴグとの間に不和を生ぜしめ元のマゴグに回復し還る事を得べしと云ふを料理人の妻ポテンシャールの後にて聞き居りしが君の能く何事にも口を出す人にぞある君の彼女の君を怖るゝと思ひ居給ふかと云つゝショットの首筋を捕へて傍の窓の上に押し上げ死せよと云ふ迄の其處に居り給へと笑へバショットの飛び下るとの叶はず下し給えれ下し給えれ誰ぞ助け給はれと叫べと呼べと皆々の笑ひ居るのみ誰とても下し與ふる人なきにショットの終に涙を流して謝しければポテンシャールの笑ひながら君の能く人の妻を彼れ是れと云ひ給ひしが如何にも君の用ある人ありかし免せよと云ふか如何おぞやと嘲り笑はれショットのまそく堪らへせして死せよと泣きければポテンシャールの手を伸しショットを籠より抱き下し向後の餘計を言を云はぬ者ぞと云ひければ皆々ドット笑ひける斯くてコルモンデレールの料理人に向ひ暫の間其の家に己を寓居せしめんとを請ひしに夫婦の心よく承引してサイスリーの部屋をコルモンデレールの室に借すとに定め良話も盡さける時に料理を食堂に山

の如く持ち出しけるが折りからマゴグも妻を連れて入り來り皆々と共に食卓に向ひけるが此新婦の即ち先きの後家にて終に婚姻せしあるがマゴグの今何事か妻の心に逆らひしと覺しく妻に耳の邊を打ち叩かれしもマゴグの怒りもせず反つて妻を慰めければ皆々のア、昔のマゴグは非ずと笑ひせよめきけるマゴグの人の笑ふにも一向に構は老山の如く積みたる料理を一人にて食ひ初め忽ち其半分をマゴグ一人にて食ひ盡くしけるコルモンデレールのマゴグに向ひ君の相變ら老大食を致るゝかか令閨の前もあるものを少しの遠慮を給ふて如何ん此の料理の二十四時間を費さねバ出來ぬものと聞バと戯るればマゴグの食ひあがら左れば僕之を廿四分間に食盡し候べし實に今日の馳走の平日に勝りて甘かりしと斯く皆々の心にもあき戯言を云ひつゝ樂み興する折しもあれ一人の此處に入り來れる者あり衆人の之を見るや否や今迄笑ひ興せし聲も一時に止みて宛ながら大風の過ぎさりし後の如き有様あり抑も此の入り來りし人を誰とにする是れ即ち人々が蛇蝎の如く恐れ且つ嫌ふ所の半番ナイトありナイト

の先きにコルモンデレーの計略に陥りて却て鐵鎖に繋かれて牢中よ呻吟せしが幸ひにしてダットレーの爲めに濟されて自由の身躰とあり(前回よ見ゆ)今日しも此處に來りしが此時既にジャンの王冠を失ふて囹圄の中に不幸を嘆つ身とあり榮枯盛衰地を換へてナイトの女王マリー方にて權勢第一たるレナードも附從して其手先に使れける故今コルモンデレーの此處に在りしを見て虎の威を借る狐の顔の最と惡々しげに進み寄り咄々汝の尙は打ち洩らされの魚の如く網の目を潜りて此處の邊りに彷徨か惡き汝なれば容るしにせず卒て是より女王の命を乞ふて汝を牢中に繋くべければ其處動かすに待つて居よコルモンデレー「言も愚かや我主ジャン天運拙くして囚れの身と成り給ひし上の我とて囹圄を恐れんや時あり命あり只一命を天運に任せんのみ」ナイト「善こそ云ふより必ず其處を動くかよと罵りあがらに由り行きたり

是より先き矮人シットハサイスリーが何物にか欺られて何れの處にか連れ行かれ今に歸り來たらぬ爲め其親たる料理人夫婦が最といとう心と傷

むるを見て是の必定ナイト奴が驅かりて地中の牢へ伴ひ行き藏し置くに相逢あし此處の我が功名の顯はし時あり如何ふもして牢中へ尋ね行きたりイスリーを濟ひ出し父母の喜ぶ顔を見もし又美人サイスリーに禮を云とれて見たさものなり去るにても彼牢中に入るべき鍵のあきと奈何せばやと獨り心に問ふ折りしもナイトが入り來りしを見しに其腰に夥多の鍵を下げ居るを見出だしたりコハ屈竟と思案を定め其身の小さき幸ひに竊かにナイトが倚りたる椅子の下へ潜り入り手早く腰ある鍵を盗み取りしに斯くとも心付かざればナイトのハコルモンデレーを罵りつゝ外の方へ出で

行きたれバシットも彼奴再び歸り來らば我尙此に在つての面倒ありと續て何れへか出で去りたり茲に又ナイトの料理人の室を出で去りしが女王の許に行きてコルモンデレー捕縛の命を乞はすして牢中を見廻はらんとて其戸口まで行き但見るよ腰ある鍵を何時の間にか盗まれたれば大に驚き是れ必ず彼の處に居りし者どもの惡戯ならんと韋駄天の如く走り歸り獅々王の如く猛り吼えて鍵を返せと罵れど何れも皆知らぬくと答ふる

のみ更ニ詮議の届かされバ流石のナイトも詮方なく再び外に出で行きたり此時まで何れにか潜まり隠れし矮人ツットの肅然として出で来りコルモンデレーの前に進み盗みし鍵を差出して小生私かに此鍵を盗みたれば急ぎ是にて地中の牢に至りサイスリー嬢を尋ね給へ小生も亦御供致し共に尋ね参らせんと云ふにコルモンデレーの其敏捷を譽めそやし然らば是より尋ねんとて地牢の中へツットと共に赴きたり
 今又新た又説き明そにも及ばざらんが此地牢の隧道の縦横左右に通じて宛がら迷洞入りたる如くあれバコルモンデレーとツットの初めの中相伴ふて彼方此方とサイスリーの所在を覓めけるに何時か二人の見失ひ其行く方を異にして思ひくゝ又覓めける茲に又ナイトのツットの推察の通り父母より依頼しと詐りてサイスリーを伴ひ出し強て我意に従はしめんと挑みしにサイスリーの却々に其心に従はばこそコルモンデレーを戀ひ慕ふ情の切なるを表としてナイトの意を拒みしかバナイトも俄に其思ひの遂げ難きを察し懲して後に靡かさんと悲しむサイスリーを引き立

て地牢の中へ押し込め置きしが今又ナイトのコルモンデレーとツットが牢中にサイスリーを尋ね居るとも知らず亦他より合鍵を借り來つて地牢に入りサイスリーの處に至り頻りに之を口説きけるに心を金鎖の如くに持ちふるサイスリーかれバ幾度ナイトが手を換はて或ハ威し或ハ賺すも終に其意に應せざるより諺に可愛さ餘りて憎さ百倍と説く如くナイトの大に罵りてサイスリーが頭を目掛けてハツシと打てバ脆弱女の常として忽ち其處に氣絶したり素より殘忍無慈悲のナイトかれバ之を見て驚きもせず其まゝ外へ立ち去りたり
 斯て又コルモンデレーのサイスリーに廻り逢はず尙は處々を尋ねける中不圖一ツの暗き室内に人の横はれるを見出し若しや尋ねる其人にもやと差し親くにコハ如何に既に命絶たる女の死骸にて其面の壁に向ひたれば知りがたさに益驚き近き見るに壁上に白く其名を書き殘せり燈を差し出して之を讀むにアレキシヤと記したりコルモンデレーの再び驚き是れを先きにナイトの爲よ苦められたる狂女ありしと思ひ彼の時我れに尋ね出

さるれば尙命を全ふし得られしものを今見出したりとて早や詮なし
 嗚呼不憫ある狂女かちと云ひつゝ又傍を見るに古びたる帽子ありて其中
 にアレキシヤの夫の新敷を誹りし爲め虐殺されアレキシヤも同く獄中に
 投せられしが牢中に女子を分娩して之をバ牢番のナイトに奪ひ去られ今
 の料理人の義女とあり居ることと記したりコルモンデレー之を見てされ
 バサイスリーの斯く由緒ある人の女かち嗟嘆しつゝ立ち去れり此アレキ
 シヤに付ての一條の話柄あれど本書に關係少なければ省きて茲に載せず
 却説コルモンデレーに分れたるシットの會て一たびナイトに案内されて
 此中を見物せしとわれバ前後左右の嫌ひなく處々方々を尋ね行き終にサ
 イスリーがナイトに打れて氣絶し居る處に至り驚きて介抱しけるに漸や
 く蘇生したれば助けられし主のサイスリーより助けしシットに更らに
 喜び勞りつゝに父母の許へと伴ひ歸れば是より先きコルモンデレーの既
 に牢中と尋ね倦みて料理人の處へ歸り居て共に頭を病せる折故今サイス
 リーがシットに助けられて恙なく歸り來ると見て一同喜びの眉と開き一

つのシットの功を稱し一つのサイスリーの恙あかりしを祝しけり

○第廿三回 前女王賢明及其出牢

茲又前女王シヤンの一旦榮の夢破れて孤床肌冷かある囚れの身とあ
 りしが素より賢明の性なれば能く天命に保んじて園園の中にありても怨
 める心なく其死を覺悟したれば亦悲しむ色もあし只來生の幸福を祈
 りけるが此塔中(即ち牢獄)を守る牢丁の其職に似せ心優きものにてシヤン
 の不幸を憐みて屢々問ひ來つて慰むるにシヤンも折りくゝ之に向つて
 聖經の難有きとちと説き示す事ありしより牢丁の益シヤンに化せられて
 朝夕に厚く心を用ひて見廻りければシヤンの小人も敬ゆれば其甲斐ある
 を喜びけり斯てシヤンの王位に在る日の最短期は思はるゝに引換て一日も
 一年の長きが如くに思はるゝ園園の中に何時しか月を越し仰ひて天運の
 拙きを嘆じ俯して死期の至るを待けるに或日の事ありき法廷より呼び出
 されければ今日こそその死刑の宣告を受けるあるべけれと覺悟しつゝ護衛の
 卒に圍まれて屠所の羊の歩みを進め塔門の外に出でける所にフヘケンハ

一の待ち設けたる様にて進み出で「貴嬢お忠告すべき一事あり貴嬢今日法
 廷に出であらば死刑を宣告さるゝの必定なり拙僧甚だ貴嬢の賢明にして徒
 らに九泉の鬼とあることを惜むの餘り今日又此處にありて貴嬢に改宗の
 事を勧め参らそあり貴嬢若し御心を改めさせられ新教を棄て舊教を奉じ
 給はば拙僧身に引受けて御命を濟ひ参らすべし能く御思慮を廻らせ
 給はれと言を盡して勧めけるハ「シャンの惡びれたる色も亦く貴僧の忠告
 の淺からず思ひ待れど今の生きて甲斐なき命あれば強て存命へたしとも
 思ひいとす且や改宗せば肉躰の死せざる事を得はんが斯てハ躰の生け
 るも心の既に死せるものぞかし若し自ら守る所の宗教によりて命を失ふ
 とも肉躰の死するも心の未來までも生き延びん改宗の事思ひもよらず
 再び口より出し給ふおと言ひ放てハ「ケンハムを初めとし護衛の人々
 も其健氣あるに感動して涕を落さぬ者もなし斯くて法廷に出づれば我よ
 り先きハ夫マツトレも茲に在りて共に手を把りて不覺の涕に暮れたり
 ける其時マツトレハ「シャンに向ひ我等運拙くして此地に在つて再び王

位に即く能はされハ九泉の下に行きて王冠を頂くべし左りおが上天下
 未だ我々を棄て給はされハ再び此世に在つて王冠を頂くことの無しとも
 言ひがたからんか御身も其身を珍重做給ふべしと云ふに「シャンの不審晴
 れず今日ハ夫妻ともに死刑に行はるべきと思ふに夫の尙は再び王位に即
 ぐともありあんかと思ふの如何なる心の迷ひよやと獨り心を傷しめける
 に此の日も亦た死刑の宣告おく只だ改宗のことを勧められしのみにて塔
 中へぞ歸へされける其日より後ハ「シャンの死刑の遅きこそ却つて怨みお
 れと嘆つに付けても夫の心の測りやられず尙や此の期に至りても王冠を
 羨むの妄念晴れざるにやとそれのみと愛ひ悲み坐に涕を拭ひあへぬ時も
 多かりける
 斯くて又或る日のことありき彼牢丁ハ「シャンの許へ入り來りいと懇懇に
 慰めて後ちに改め問ひけるや「御身の様子を見参らすに此日頃ハ甚く
 悲みに沈ませられ給ひ御涕の乾きあへぬ日も多しと見参らするが女王の
 御身おれば死刑の近からんを思ひて斯く計りよあらせ給ふにや御心の底

聴せ給はれと云ひければジャンの點頭で汝が斯く思ふも理あり左れど我
 が悲むの死を恐るゝに爲めあらむ此中又囚はれしより死の既に覺悟し居
 れバ今にもあれ死刑に處せらるゝとも悲みと思ふこともあけれど我が悲ま
 るゝの他あらず夫ダットレー君の心の底の測られざるが爲のみありと云
 ふに牢丁の益感と御身の心の丈夫も之に恥ぢ申さん左れば上天の御身の
 一命を助け参らせて今日より自由の身に爲し申すなりと聞てジャンの俄
 かに信せ老ソハ虚言あらんと疑へば牢丁少しく笑を含み是れ御覽ゆへと
 差し示したる書を見るに是れ果して其の身の赦免ありジャンの夢の如
 く思はれて其の全くでありしよ然にても夫ダットレー君の如何あら
 せ給ひしやと問へば牢丁答ふるやうソモ亦赦免を給たりて今い早や自由
 の身とならせ給ひしならんと此一言に初めて喜びの眉を開き深く新王マ
 リーの寛大と感じけり是れ新王の心にて一旦王位に上りしジャンを左右
 なく刑するも悼はしとして終に夫妻を赦免せしにて是れよりハ舊のシオン
 ハウスに退隠して静安又世を送るべしと命せられて放ち歸されジャンの



ル得ヲ状免赦ニ門牢王女

夫と共に馳て安穩にシオンある舊家に歸り姑く無事の日を送りけり
 譯者曰く右にて書中の主たるジャング半生の事の畢り此書の結局を
 見るを得たり然れども書中に出でたる實位の人々より第二の女王マ
 リーの上に付て未だ收局を見ず然れども一々に之を譯出すれば紙數
 の多きに堪へざるものあり故に書肆の意を擧みて茲に省畧をせしぬ
 但原書中にも初めに大に關係を有せし如き人にては後に至りて收局
 を見ざるものあり彼の巨人兄弟矮人ショットの如きも後に至りては左
 せる收局あきに依れば畢竟書中に點綴せるまでと覺ばしく全體に於
 て大關係なきもの往々として其收局を見ざるもの此他の西洋小説
 中にも多くあり左れば此編に收局あきものも悉く譯者の省畧せると
 思ひて之を尤むるあかれ將た又茲に一の譯載せざるを得ざるものあ
 り是れ即ち此書の團圓にてジャングが夫マツトレーに擁されて女王マ
 リーに抗し終に敗滅を致すの一章あり此章ハジャングが赦免せられて
 より後に直ちに引き續きて團圓に至るの談話あり要するに前回にて

シヤンがシオンハウスへ歸へりしより左に記す結局の一章との間に
て原書中に在る某々等の收局と一二の戦争を省略して以て購讀者の
便を計りたるあり原著者に對するの罪の素より深しと雖もソハ他日
機會あらば此書の補遺を譯して其罪を償ふことあるべし

○第廿四回 結局

前女王シヤンの夫ダットレーの不思議にも既に無き命を助けられシヤ
ンと共にシオンハウスに退隠し表にハ謹慎の色を見すれど其内にハ王冠
の名譽心と其父ノルサンベルランド公の爲めの復仇心とは一日片時も忘
るゝ暇なく只快々として樂まず已が室内にハ其妻たるシヤンすら入るこ
とを許さず只コルモンデレーのみを入れて何事をか密々に語らひけるが
終に反逆の計を決し寄々に同志の人に結びシヤンの父あるサツフオル
公を初めとしてロルド、シヨントーマス、グレイスロツツ、モルトンの諸人及
び彼佛國の使臣デ、ノエールスも亦女王マリー方に反くことありて(後に
出づ)ダットレーに氣脈を通じ此外にトーマス、ヤットと云ふ一豪傑ありて、ノ

兵を募り置き一時に起つて女王を責め滅さんと専ら其事に力を盡せり左
れども名なき戦は擧ぐるわたはされば或る時シヤンにも其擧を告げて御
身再び女王の位より上り給はんやと説き勧めけりシヤンハ之を聞て大に驚
き「是ハ淺ましき御心か奇女王マリーハ我々が萬死を免したる恩人あるに
今又之に背きあば上天あどか憎み給はざらん幸にして餘生を保ちて此
オンハウスに靜安の日月を送るを得ば妾ガ幸福是に過ぎたるものあら
すゆめく思ひ止り給へ然らざれば妾ハ去つて女王マリーの許に行き之
に仕へて其恩に酬ゆべきのみと涙と共にかき口説けばダットレーハ大に
怒り「御身去らば去るべきのみ若しマリーの處に行かば我れ不日大軍を以
て攻め行くことを告げ知らせよ又御身と我とが夫妻の縁ハ今日限りと思
ふべしと強き男の心よかはり弱き女の情ゆる流石賢明のシヤンの心も終
み夫に靡かされて擧兵の事に同意して其準備を語らひしハ是非もあかり
しことなりけり

却説女王マリーの初めはコイルテチーを撰みし後の是ぞ我夫と定めけるに彼姦才に長じふる西班牙の使臣レナードの計畧にて漸々にコイルテチーを疎遠して終にレナードが最初の心に計りし如く其本國の王を女王の夫と爲すことに定め纏て其結婚の日さへ定まりたり左れば初めのレナードを助けてジャンの天下を亡ぼしたる佛の使臣デノエールスの大に驚き斯ての英國の西班牙の爲めに專横されんコハ由々しき事にありけりと私かに反旗を擧ぐることに企て佛の公使トーマス、ヤットと計りてマットレの方の氣脈を通じ双方より相應じて兵を擧げんことを約したり茲に又コイルテチーも既に決闘まで迄たる仇敵のレナードが勢力を得て已の終に女王の夫とあることまでも破られ其遺恨の骨髓に透りければ是亦何時しかマットレの方の氣脈を通じてマリー方に反さしが尙や兵を擧ぐるの日までの何事も知らざる面こそ宜けれと以前の如くに宮中へ出入せけるが終に此人よりしてマットレ一方の敗れとなる原因を起せるに到る其次第を記さんに西班牙の使臣レナードの本國の習慣として舊教に關する

地への必き力を盡して其儀典を許るからふ豫てより舊教の信仰者たるマリーを助けて王位に昇せし上に尙ほ足れりとせず計りて其本國の王をマリーの婿とし以て舊教の根を固めんと欲し終に其計を成就して女王が即位の日より心にそれと定めたるコイルテチーを排斥して今日しも本國より來りし王と女王マリーが結婚の式を擧るまでの順序に至れり左れば萬乗の主たるもの、結婚あれば宮中の賑ひの筆おも盡されぬ程にて笑ひ興をる聲と壽き祝ふ聲の外に溢るゝ計りあるが之に引きかへコイルテチーの妬さと口惜に腸も裂る計りなれど今日も亦何知らぬ顔にて宮中に入り込み居たりけるが是より先きトーマス、ヤットの佛使デノエールスと力を合せ既に反旗を擧げて其兵頗る盛なりと聞ぬ其外にも兵を擧げて反徒に應じるもの處々にあらんとする風聞の噪しく刺さへ宮中にも私に舌を敵に通じ反兵の王宮近くへ攻め寄せ來る日を待て内より起つて應せんと計るものあるよし誰れ云ふと亦く洩れ聞ゆるに目出度婚姻の今日も私かに愛を抱くものもありしが彼レナードの一層に心を用ひて内應者と疑は

しき者を尋ねけるに果してコイルテチの舉動に付き稍疑ふべきの事無
 きにあらざれば、彼を更らに心に落ちぬ事多きに今んとて俄に兵卒に令
 してコイルテチが居りし一室を取り圍み不審の旗々を擧げて問ひ質す
 に初めの彼れ是れ陳せしも終ふの言迫りしか又の兵威に應せしか將又後
 悔の心を生せしにや甲斐なくもダットレーに一味の事を白状し加之ダッ
 トレーのジャンを推して再び王位に昇らしめんと計り居ること及び是等
 の人々不日兵を擧げてテ、エールストリーマスヤット等に應ずる手段ま
 でを明に告げれば女王マリイのレナードと計り先んずれば人を制す
 と云ふことわれバ我より兵と向けて不意にシオンハウスを取り圍みシヤ
 ン夫妻を捕ふべしと急に其用意を致しけるが又此事を早くもシオンハウ
 スへ急報するものありて疾く茲を落ち延びて後ちに兎角も計り給へと
 註進二人に及びければダットレーの嘆息し嗚呼よしさき人に語らひて再
 び事の敗れとありしか残念あるとともありと齒がみをなして悔みけるが
 今將た詮をばも有らざればやがてジャンに向ひ既に御身も聞かると如く

び耻を曝すの必定あり疾く此處を落ち延びてトーマスヤットの軍に投じ
 後徐に計るべし疾くせせや疾くせよと迫るにジャンの涕を流し「天よ
 り棄てられし我々を逃るゝとも迎も助かるべき命ならせ妾の此處に
 留まりてマリイの兵に捕はれて女王の前に至り其罪を謝すべきのみと拒
 みて其處を落ちざりしがダットレーが種々又勸むるより終に「妾が身の去
 るも妾が心の茲に留るべし今此處を去るのジャン其人にあらずして只一
 つの跡ありと言ひ了りて仕度を收め馳て敵兵の來るに先立ち向れの方へ
 か落ち行けり
 茲にマリイより遣れし兵の疾風の如く寄せ來りて水も洩らさずとまでに
 シオンハウスを圍みしが既にジャン等の一人々の遠く落ち延びたる後され
 ば空く王宮に歸へりけり左ればジャン等の忍びくは落ち行きて豫て合
 跡せし兵と潜め置きたる處に達しやがて軍を起してトーマスヤットデ、ノ
 エールスの兵と二手とありて王宮へ攻め寄せければ一時の威勢盛なりし

も味方の人々處々の戦争に或は撃たれ或は降りダツトレも終に敵軍の生虜とされりシャンの今何よしに戦を好まんとして自ら女王マリーの許に行きて罪を乞ひければ他の將卒も多く降参に出でにけりシャンの姑くの間牢中に繋がれしが此度の免さるることなくしてやがて或日の事に死刑に處せられ天下無双の花空しく一夜の雨に摧けけり

茲に戦争畢りし日佛公使トーマスヤットの計略破れて勢ひ挫けしが尙ほ已ますとや思ひけん何時半番ナイトと語らひてレナードを暗殺せんと企てけるがレナードの運強くして既に殺さるべき處へコルモンデレー來り合せ速かにナイトを引き倒しければレナードの忽ちにナイトを其處に切り倒せり此時コルモンデレーの宮中に紛れ入り計略ならずして逃路を求めけるが廊下の邊に誰やらん闘ふものありて一人の既に危ふければ誰ぞと見るに上ある日來仇あるナイトされば駈寄り狀に引倒せば下ある男も料らざりき敵の張本レナードなりコハ折悪しと逃れ去り彼方此方を廻る中ゆくりあくるも亦サイスリーに逢ひコルモンデレー「乱軍に紛れて宮中

入りし味方の悉く早や捕はれぬと殺されぬとされし今も余一人にて詮方なく逃るゝ路を尋ぬるありと語ればサイスリーの大に喜び先づ其意あきと祝し妾も女王も從ひ今日しも敵中に捕はれしが宮中の様子を詳細に知れば御身を逃し参らすべしと臆て或る櫓の方へ導き此所より逃れ給へと示しければコルモンデレーの既も櫓より下りて逃れんとせしを追兵の爲めに逐ひ迫られ今も是まであり運を天に任せんとて身を跳らし避よりして濠の中に飛び入りしが終に敵の爲め捕これたり時お後より來たりしレナードの此状態を見て「先刻我が危急を援けてナイトと引き倒せし功に因り一命を助け申さんと語る處へ又たナイトの屍を荷ひ來たるものあるを見れば未だ全たく命され臨終の際にサイスリーの身の上を語り又其系圖の在處を示して敢あくこそ死したりけれ斯てレナードの

コルモンデレーを思ありとして助けければ新女王マリーもサイスリーが父母の舊教の爲め死したるを憐れみて之を助け且つコルモンデレーと結婚することを許したり是れ後の話しあり此の外にダツトレを初

(六百八十六)

めとして重立ち、る人々の死刑に處せられし人も多かりしが又た免されたる人も多く是にて全くマリーの天下と成りマリーの種々政令を改革して英國を一新し今日に至るまでも大いに世に知られし女王ありけり尙やマヤンが再舉の後に至りては多くの話われど本回の務めて簡略に其結局を譯せしまであれは其初めに比べて簡略に失するを尤め給ふあかれ

版權登錄

悲風 倫敦 塔終

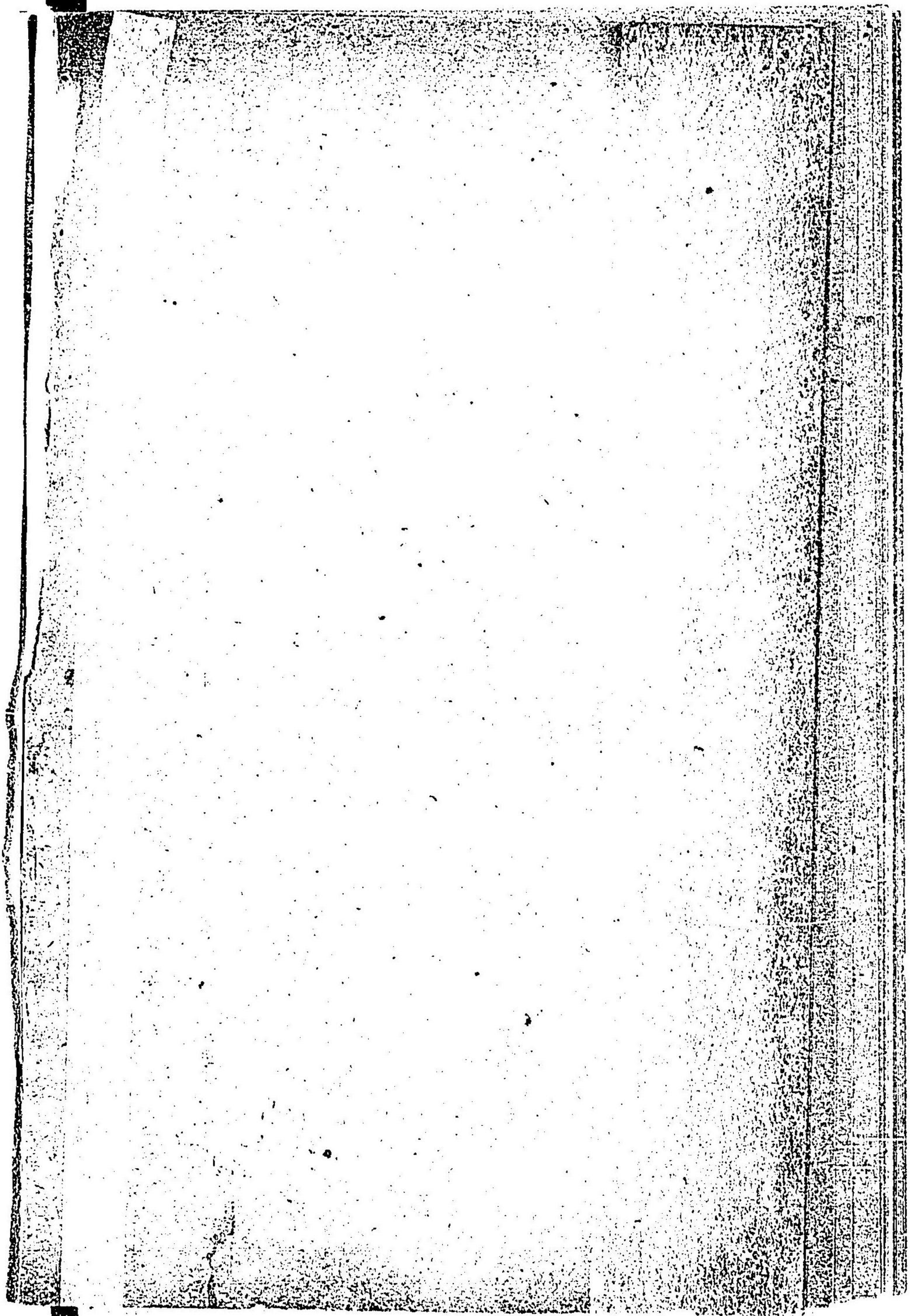
明治廿二年二月三日印刷
同年二月四日出版

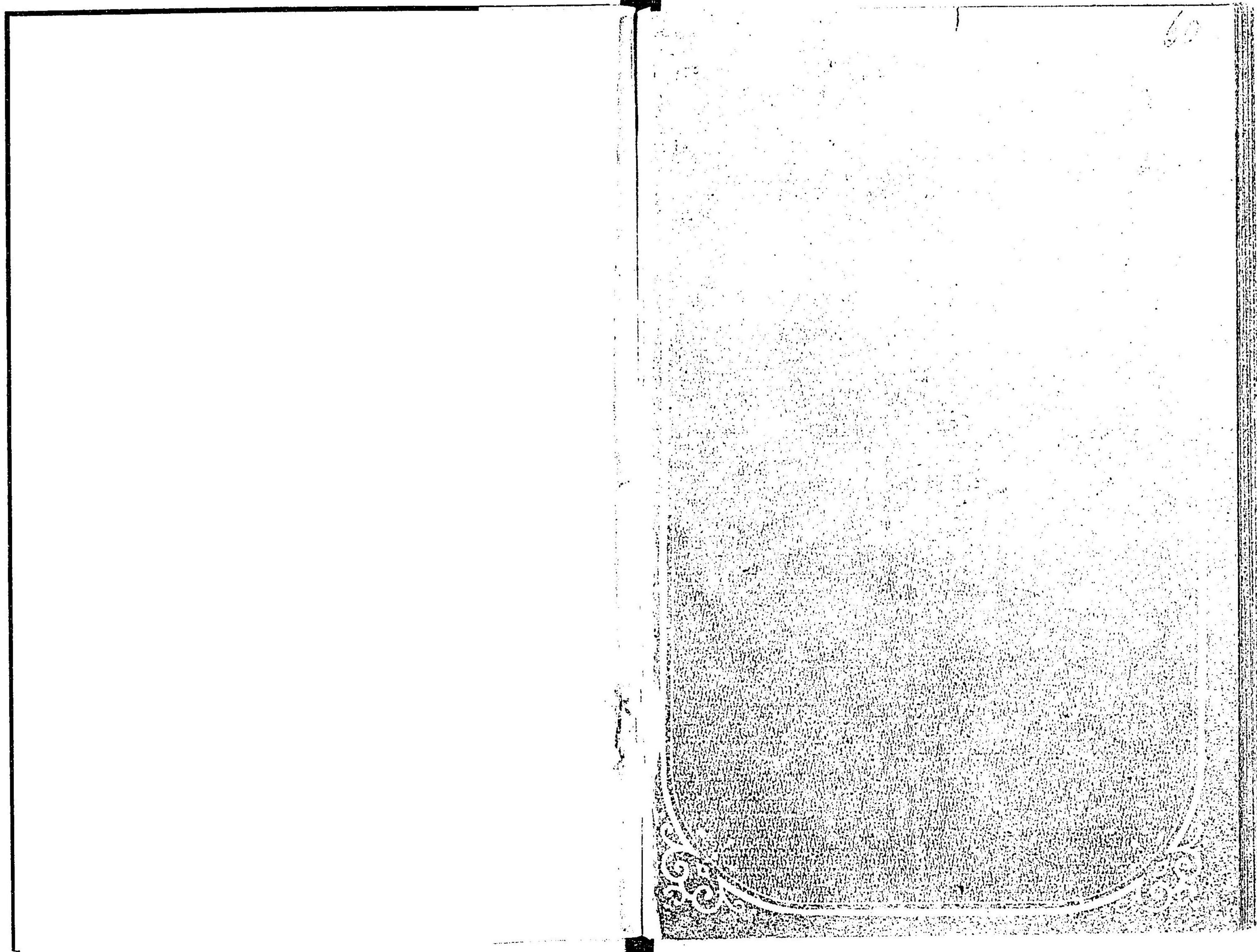
定價金五拾錢

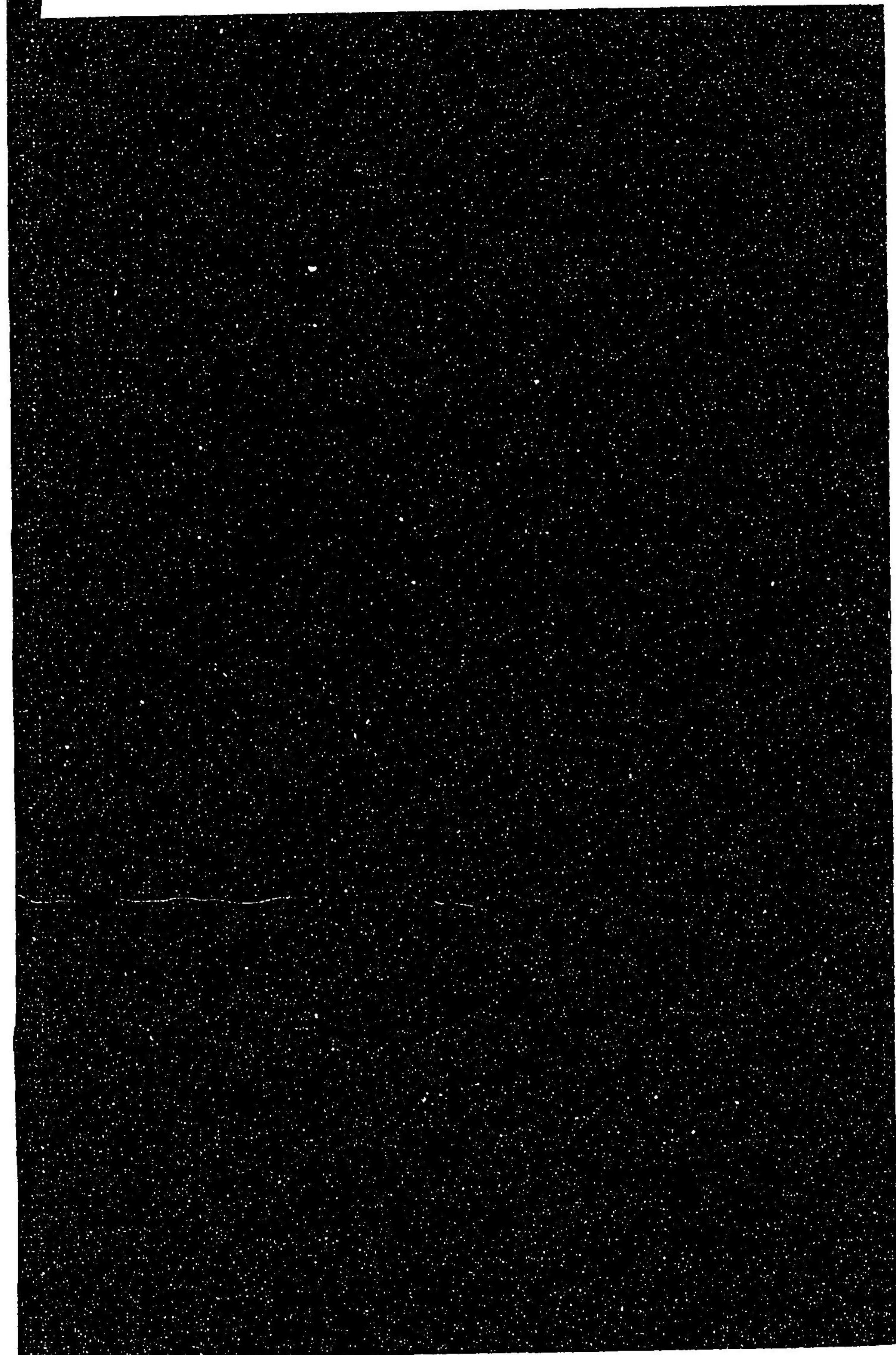
發行者 千葉茂三郎

印刷者 宮本敦

發行所 京橋區銀坐貳丁目六番地 共隆社







特 13

561

禁
複
写

101449-000-5

特13-561

倫敦塔

ウヰリヤム・ハリソン・エインスウォルス/著

M22

DBY-0788

